



パイナップル
ストーリー

パプアニューギニア宣教物語

オットー・コーニング

The Pineapple Story

パイナップル ストーリー

オッター・コーニング

(バプテスト系パプアニューギニア宣教師)

砂川 満 訳

もくじ

| | |
|--------------------|----|
| パイナップル ストーリー | 1 |
| 神の居住区で生活する | 22 |
| 神様の学校—権利の放棄 | 42 |

パプアニューギニア宣教物語

道徳性の低いと思われた人々の中に置かれて、はじめて自分が自称クリスチャンであることに気づかされた宣教師の尊い体験。なかなか自分の誠意に答えてくれない人々にどのように接していたか？

笑いと感動の証。





パイナップル ストーリー

「・・・あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」(ルカ 14 : 33)。

この教訓を教えるために、神様は私たち家族をパプア・ニューギニアへ送られました。その土地は非常にやせていて、作物が育ちません。何を植えてもうまくいかないので、最後の手段として、パイナップルを植えることにしました。しかし、パイナップルが収穫できるようになるまで、少なくとも三年はかかります。三年待って、ようやくパイナップルが実をつけ始めました。

ところが、その原住民は、まるで泥棒の集団でした。誰もが、生まれつき盗癖があるような状態でした。ある日、私たちが持っていたたった一つの缶切りが盗まれ、しばらくして、女性の首飾りになってぶら下がっているのを見つけました。赤ん坊のおむつを留めるピンは、ピアスになって女性たちの耳に突き刺さっていました。私の T シャツを着た人が(そこにはシャツを着ている人なんかいません)、私に魚を売りにやってきたこともあります。私たちの持ち物は、手当たり次第盗られました。当然、パイナップルの実がつくや否や、どんどん盗まれていきました。数ヶ月たっ

でも、一個のパイナップルも手にすることはありませんでした。「連中よりも先に収穫すればいいじゃないか」という人もいるでしょうが、彼らは、パイナップルがまだ青いうちに盗ん



でいくのです。どんな果物でも、青いうちに食べてしまいます。バナナが黄色くなるなんて、知らないのではないのでしょうか。

母親たちは、子供たちの盗みの腕を磨くのに、私たちのパイナップル畑を訓練場として使いました。

その結果、私はいつも怒り、いらいらしながら、自分の持ち物を回収するのに忙しくしていました。現地の人々は、私のことを「けちで怒りっぽい白人」と呼びました。私も負けてはいません。「君たちさえいなければ、私はいい宣教師でいられるのに」と言って反撃しました。事実、彼らに出会うまで、自分が怒りっぽい人間だとは知りませんでした。皮肉にも彼らの存在によって、私自身の醜さも明るみに出されることになったわけです。

宣教の傍ら、看護師である家内が診療所を開いていました。私は彼らに、「盗むのをやめないと、診療所を閉鎖するぞ」と言いました。この脅し文句は全く効果がなかったため、仕方なく診療所を閉鎖しました。ところが、ある子供が病気で死んでしまい、彼らはそれを私たちのせいになりました。無論、持ち物よりも人命のほうが大切なので、診療所を再開することにしました。雑貨店も

開いていたので、盗みをやめさせるために、雑貨店を閉鎖しました。今度は彼らの方が怒ってしまい、「けちん坊の白人」という捨てぜりふを残し、こぞってさらに良い獵地を求めて引っ越してしまいました。

周りに原住民がいない生活！それは、まるでリゾート地でのバカンスでした。彼らは、私たちの生活を一日二十四時間監視していました。それもあからさまに窓から家の中を覗くし、たまに家族でピクニックに行っても、必ずついてきます。そんな彼らがいなくなって、どれほどほっとしたことでしょう。パイナップルも食べ放題！毎日、読書と手紙書きに明け暮れました。

ところが数週間が経過し、パイナップルにも読書にも飽き、何よりも良心が痛みました。私たちの宣教活動は、信徒の皆さんの献金によって支えられているわけですから、伝道地において悠々自適に生活するのは間違っています。ある日、たまたま通りかかった男の子に頼んで、原住民の人たちを呼び戻しに行ってもらいました。

数日たって、「先生、ただいま」と言いながら、彼らは戻ってきました。言われなくても、原住民が戻ったことは臭いで分かります。彼らは、決してお風呂に入らないのですから。とにもかくにも、彼らは戻ってきました。再び、持ち物が次々と盗まれました。再び憤慨し、いらいらする日々が始まりました。「けちで怒りっぽい白人」と言って非難されました。「そんなことないよ。君たちとさえ関わらなければ私は善人なんだ」と心の中で反論するものの、むなしく響きました。

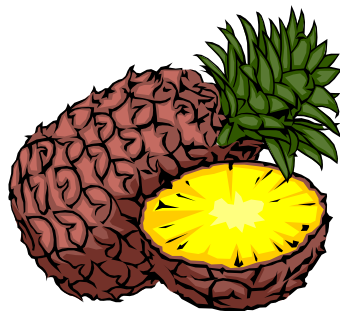
ある日、買出しに行っ、大きなシェパード犬を手に入れてきました。原住民は、その犬をととても怖がりました。私の企みは、

初めて功を奏したように思われました。パイナップルも、他の持ち物も、被害にあわなくなりました。ところが……、結果は思わしくありませんでした。犬がいるおかげで、誰も伝道所を訪れなくなりました。伝道所から数百メートル離れたところに家内の診療所があったのですが、診療所にやってくる大勢の人が、建物の中ですし詰め状態になりました。誰も外に出たがりません。仕事ができなくなった家内は、「犬を処分して」と言いました。それで、仕方なく犬も手放すことにしました。

次の対策は？やれることは何でもやりました。次に、譲歩策をとりました。私にしてみれば、大変な譲歩です。原住民を呼んで、私はこう言いました。「パイナップル畑の真ん中に目印をつけました。この目印から向こう側のパイナップルは君たちのだから、好きだけとりなさい。但し、目印からこちら側のパイナップルは私のだから、とってはいけない」。

それでも、彼らは私の側からも盗みました。さらに悪いことに、盗難を現行犯で見つけて注意すると、すばやく反対側に飛び移って、その場で悪びれる様子もなく、にやにやして立っています。私はすこぶる気分を害しましたが、反省し、神様に「もう二度と腹を立てません」と約束しました。私は宣教師であるのに、原住民に対して腹を立てていては、彼らをキリストに導くことなんかできません。そのように考えて、心を入れ替えようとしたことが何度もありました。

しかしある時、男がパイナップルをいくつも抱えてやって来て、「先生、パイナップル買わないか？」と言うではありませんか。「他人の物を盗ん



でにおいて、よくも被害者のところにそれを売りに来られたものだ」と思い、またもや腹を立ててしまいました。失敗です。

ある日、畑に立派なパイナップルがなっているのを見つけ、二週間もすればおいしく熟することが分かり、苦肉の策として、草をかぶせてパイナップルを隠すことにしました。そろそろ熟しただろうと思った頃に草をのけて見ると、パイナップルは陰も形もありません。再び、くやしい、腹立たしい感情に襲われました。腹を立てては告白し、赦していただく、といった経験の繰り返しでした。

神様は何度まで、私たちの罪を許して下さるのでしょうか。七の七十倍でないことに、私は感謝しています。そこで神の恵みが尽きてしまうなら、私たちは生きていけなくなります。一日一回だけ罪を犯したとしても、七の七十倍なら、一年と三分の一で神の恵みを使い切ってしまうことになります。ヨハネ第一の手紙 1章9節の約束に感謝しましょう。

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」。

怒りの罪を止めることのできなかつた私は、大いに悩みました。できることは何でもやりました。子供に諭すように、彼らの説得に努めたこともありました。「ここの土地は、私が君たちの酋長から買ったのだから、ここの畑でできるものは、すべて私のものではないだろうか？」分かったのは、私の畑からパイナップルを盗む人たちは、私に雇われてパイナップルを植えるのを手伝った人たちが多かったということでした。

彼らはこう言いました。「ここのパイナップルは、俺たちのもん

だ！」私は向きになって、「何を言ってるんだ。私がこの土地を買い、自分のお金でパイナップルの苗も買い、君たちに報酬を払ってパイナップルを植えてもらったのだから、ここのパイナップルは私のだろう？」と反論しました。しかし彼らは、「確かに畑は先生のもの。パイナップルの苗も先生のもの。だけど、パイナップルの実は俺たちのものだ。」彼らの説明によると、植えた人がその実を食べるのがしきたりだと言うのです。

彼らの言い分はこうです。「パイナップルの苗を植えたのは、先生ではなく俺たちだ。だから、パイナップルは、当然俺たちのもの！」自分の物でもないパイナップルを盗られて、私が怒るのは不思議千万だ、と彼らは言うのです。皆さんは、そのような経験をしたことがありますか。私たちの持ち物は、すべて神様のものですよね。それらの持ち物の故に、私たちが怒ったり、やきもきしたりするのは、実は的外れなことなのです。そうすべきではありませんでしたが、私はパイナップル畑のことで大いに頭を痛め、睡眠不足になるほどでした。

そのような矢先に、休暇をもらってアメリカに一時帰国しました。実は、家内も私も、パプア・ニューギニアには二度と戻りたくない、本部に嘆願するつもりでした。「あのような泥棒連中のいる場所以外なら、どこに派遣されてもいいです」と祈りました。皆さんは神様に、「・・・以外の場所なら、どこにでもまいます」と訴えたことがありますか。

一時帰国してから間もなくして、シカゴで催されたあるセミナーに参加しました。二日目の晩、講師のお話は、「権利」についてでありました。講師は時間をかけて、権利を放棄することについて話していました。お話の間、私は伝道地のパイナップル畑のことばかり考えていました。

お話を聞けば聞くほど、私は惨めな気持ちになっていきました。彼はこう言うのです。「あなたの所有物を神様に明け渡しなさい。神様は、ご自分の財産を上手に管理なさいます」と。「そんな事、考えたこともない」と私は思いました。そして講師は、「あなたが正しい動機をもって神様に明け渡すならば、それが何であっても、決して不足することはないでしょう」と言いました。それは真実で、実に聖書的であります。自分の持ち物を神様に明け渡すならば、それが何であっても、神様の支配に入るわけですから、その物（者）に対して、私たち以上の能力が発揮されることとなります。神様の支配に入れられたものは、決して不足することがありません。講師はこうも言いました。「人と争い事を起こすなら、その人をキリストに導くことは決してできなくなります」。

それを聞いて、私はさらに落ち込みました。「確かにその通りだ。伝道地において、私と争っている人が死んでしまったら、その人は永久に失われることになる。それなのに私は、パイナップルのために争っているだけではないか。神様は、こんな私を赦しては下さらないだろう」と思いました。

でも神様は、このような私でも赦して下さいました。話を聞いている間中、私は泣いていました。彼はこうも言いました。「自分の権利を守ろうと躍起になっていたら、健康も損ねてしまいますよ」と。まさに、私のことを言っているようでした。

私はノイローゼになりかけていて、精神安定剤を服用していました。宣教師にとっては、あるまじきことです。心身ともに、ボロボロになりかけていました。私は決心して、「神様、パイナップル畑をあなたに明け渡します。御心のままに、どうにでもなさって下さい」と祈りました。

すると、天来の平安で心が満たされたのでした。会場から出てくるときの私は、まるで、負いきれなかった重荷から解放されたような状態でした。「神様、もうパイナップル畑のことで腹を立てる必要はないのですね。」何とも言えない解放感に浸り、自由の身になった感じがしました。

ジャングルに戻った私は、パイナップル畑でひざまずいて祈りました。「神様、これはあなたの畑です。ここにあるパイナップルを現地の人たちに恵みたいとあなたが望まれるなら、それでも構いません。しかし、もしあなたのパイナップルを、この忠実な僕に与えたいと望まれるなら、大いに感謝いたします！」皆さんは笑っていらっしゃいますが、今になって振り返れば、私はパイナップルを恵んでいただくのにふさわしくない者でした。

パイナップル畑を神様に明け渡して以来、パイナップルの実りは驚くべきものでした。確かに神様は、パイナップルの上手な育て方をご存知であります。彼は、私たちの誰よりも上手に、どんなものでも育てることがおできになります。条件は、私たちが神様にそうするチャンスを与える。神様は決して、ご自分からしゃべることはなさいません。もし私たちが自分の力に頼るなら、私たちが四苦八苦することを神様はお許しになります。

さて、神様が大きく立派に育てて下さったパイナップルを誰が食べるのか、私は注目していました。あのような人食い人種の異教徒たちに、パイナップルが盗られてしまうのを、神はお許しになるだろうか？ 献身した宣教師である私に、与えて下さるだろうと、私は期待



していました。しかし結局、その年も、原住民の人たちがパイナップルを盗んで食べてしまいました。

私は以前にも増して、腹を立てていました。「神様に捧げたパイナップルを、神様のパイナップルを盗んで食べるとは、本当にけしからん奴らだ」と思い、義憤に燃えていました。自分は、神のために、神に代わって憤慨している、と思っていたのです。セミナーに参加して以来、パイナップル畑は神様に明け渡したにもかかわらず、私はなおも腹を立て、神経をすり減らしていました。

皆さん、怒ってばかりいたら、健康を損ねてしまいます。私がそうでした。私はひざまずいて、神様に訴えました。「神様、私はもう限界です。あなたのためにパイナップルを守る体力も、気力も残っていません。あなたがご自分で、パイナップルを守るしかありませんよ」。

その時神様は、ローマ人への手紙 6 章から、自己に対して死ぬことを教えて下さいました。パイナップル畑に関する私の権利を完全に放棄すべきことを、神様は示して下さいました。万策尽きていた私は、神様の方法にすぎるしかありません。私は改めて、パイナップル畑に関する私の権利、パイナップルを食べる権利を、全く放棄する決心をしました。

祈り終えた私は、再び天来の平安に満たされました。「もうパイナップルの心配をする必要はないのだ。決して再び、パイナップルのことで腹を立てる必要はないのだ。自分は死んだのだから」。過去七年にわたる習慣になっていましたから、パイナップルを盗んでいる人を見ると、思わず頭にきて、怒鳴りたくなることもありましたが、少しずつ、そのような怒りも抑えることができるようになりました。そしてついには、パイナップル畑で起こって

ることが、全く気にならなくなりました。

ある日、ハイモというとても理知的な原住民がいて、彼に、「先生も、とうとうクリスチャンになりましたね！」と言われました。「どうしてか？」と尋ねたら、「この頃、先生は全く怒らなくなりました。本当のクリスチャンです」と言うのです。これにはまいりました。皆さんも経験があるでしょうが、私たちの隣人は、これまでに私たちが行った良い事よりも、悪いことの方をよく覚えています。皆さんの隣人も、クリスチャンである皆さんが、完全であることを期待しているのです。でも、完全ではない私たちが、どうしてキリストの証を立てることができるのでしょうか？

そこで、世の人々は、クリスチャンである人とそうでない人の違いを、どこに見ているのだろうか、と私は考えました。過去七年にわたって、私は現地の人々に、キリスト教について、キリストがどのようなお方であるか、クリスチャンはどのような生き方をすべきであるか、等を説いてきました。すると、彼らはこう言うのです。「先生、あなたがクリスチャンについて語るのを聞くたびに、いずれそのような人に会えるのだろうと思っていました」。言っていることとやっていることが合わないわけです。彼らは私の宣教を聞いても、見ているのは、腹を立ててばかりいる私の姿でした。そうなると、私の伝えるメッセージは無力となります。

ハイモが私に、「先生はどうして怒らなくなったのですか？」と尋ねました。私は、「畑はもうあげてしまったから」と答えました。さらに彼は、「では今、パイナップル畑を所有しているのは誰ですか？」と尋ねました。そこで、「その質問には、明日答えるから」と言っておきました。別れる直前に、ハイモはもう一度質問してきました。「先生、お願いだから答えて下さい。畑の新しい持ち主は誰なんですか？」私は、「もう遅くなったし、明日また戻ってき

なさい。持ち主が誰かは、明日教えるから」と言って、自分の家に入りました。

カーテンの隙間から外を覗いてみると、ハイモがそこにいた人たちに、片っ端から、「畑もらわなかったか？」と尋ね回っていました。その後で、家の方に向かって、「先生、持ち主が見つかりません。誰だか教えて下さい」と叫んでいました。私は、「明日また戻ってきなさい」と叫び返しました。立ち去りながら、彼らは互いに何と言っていたと思います？「持ち主が誰だか分からなければ、盗むことはできないじゃないか?!」

その晩は、あの泥棒たちにとって、苦悩の晩となりました。村の酋長の所有かもしれない、あるいはまじない師の物かもしれない、と考えると、盗むことはできません。夜中に、村中がざわついているのに気がつきました。数人の男たちが、畑の新しい所有者を求めて、村中の人たちを起こして回っていたのです。見つからなかったので、彼らは隣村まで訪ね歩いたそうです。当然、持ち主は見つかりませんでした。

翌朝早く、村人たちの声で目を覚ましました。外を見ると、村中の人々が私たちの家の周りに集まっているようでした。私はその訳を知っていましたが、家内は知りません。早朝に押しかけてきた村人たちを見て、家内はびっくり仰天し、怖がってしまいました。私は彼女に、「大丈夫、何の問題もないから。見ていろよ、今に面白いことになるから」と言って、一緒に外に出て行くよう促しました。

外に出てみると、村の人たち全員が集まっていました。私がニコニコしながら、「お早う！」と挨拶すると、彼らは一斉に、「パインアップル畑の持ち主は誰なんですか？」と叫びました。「畑は天

の神様に差し上げました」と私は答えました。今度は一斉に、鼻をこすり始めました。それは、彼らが考えている時の仕草です。とてもおかしい光景でしたが、彼らは大真面目に考えているので、私は必死で笑いをこらえました。考えた挙句の質問が、「先生の神様がいる天国には、パイナップルがないのですか？」というものでした。私は、「知らないけど、とにかく差し上げたのだ」と答えました。

ある男が、「先生、パイナップル畑は、何ヶ月くらい前に差し上げたのですか？」と尋ねました。私も鼻をこすりながら、「そうだなー、五、六ヶ月前かな」と答えました。すると、次第に騒ぎが大きくなって、彼らは興奮し、とうとう怒り出しました。そして、彼らは言いました。「先生、家の中に入り、ひざまずいて神様に頼んで、畑を取り戻して下さい」。私は、「いや、畑を差し上げてからというもの、私は幸福になったのだから、取り戻したいとは思わない」と答えました。

心配の種はなくなり、夜もぐっすり眠れるようになり、怒らなくなつて、心身の健康も取り戻しつつあったのですから。所有権を放棄して、私は幸福を得たのです。皆さんも、裕福な人をうらやましいとは思わないで下さい。裕福な人は、そうでない人の考えも及ばないほどの悩みを抱えているのですから。

彼らは、「我々が先生に所有権を取り戻してもらいたいんです」と言いました。「何故？」と尋ねると、「とにかく、先生は間違いを犯したのだから、畑を取り戻して間違いを正して下さい」と言うのです。私は、「自分が間違っただとは思っていない。かえって最善の事をしたと思っている」と反論したら、「先生がすべての問題の原因なのだから」と言われました。

よくよく話を聞いてみると、私がパイナップル畑を捧げて以来、彼らの間では、災いばかりが起きているようなのです。祈禱師に頼んでも、いけにえを捧げても、災いはい向にやみません。彼らがパイナップルを盗むので、神様が働かれて、ご自分の所有を守ろうとされたのです。神様の管理は絶対ですから。雨が降らなくなり、畑の作物が育たなくなり、川でも魚が獲れなくなり、猟をしても、何も獲れなくなりました。女性が妊娠しなくなり、このままでは敵の数が勝るようになって、征服されてしまうという不安に駆られていました。すべてがうまくいかなくなり、彼らは真剣にその原因を探っていたそうです。

彼らは私を指さして、「先生が、すべての災いの原因なのだから、早く畑の所有権を取り戻して下さい」と要求しました。「私は、畑を取り戻したくありません」と答えると、「それはだめです。先生の神様が持ち主では困るのです」と言います。このような押し問答が、しばらく続きました。

「君たちが、パイナップルを盗むのをやめたらどうか？」と提案すると、「先生は頭が悪いですね。そんな事、うまくいくわけないじゃないですか」と却下されます。彼らは慢性的な盗癖があるため、どうしても盗みをやめることができないのです。私たちは、どのような欠点であっても正すことができるべきですね。なぜなら、コリント人への第一の手紙 10 章 13 節において、「のがれる道」が保証されているからです。誘惑に遭ったなら、サタンに抵抗することです。「悪魔に立ち向かい〔抵抗し—欽定訳〕なさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう」（ヤコブ 4 : 7）。

私たちクリスチャンは、自分自身の慢性的欠点に打ち勝つことができるのです。しかし、異教に染まったニューギニアの人たち

は、サタンの力に支配されていたため、どうしても盗みをやめることができません。誘惑に遭って、それに抵抗することができませんでした。彼らは執拗に、私がパイナップル畑の所有権を取り戻すよう求めました。

私は、どうすればよいのか分からなくなりました。私が言うことを聞かないので、彼らはイライラを募らせました。このままでは、連中に殺されかねません。家内は私に、「これから面白くなると言ったじゃありませんか？」とこぼしました。もはや、笑える状況ではなくなりました。私は心の中で、短い祈りを捧げました。すると、ハイモの名が心に浮かんできました。すぐに、「ハイモ、君はどこにいるんだ」と叫びました。

群衆の中からハイモが現れて、私のそばにやってきました。ハイモは笑いながら、「先生はクリスチャンになったので、畑を所有することができなくなったのですね」と言いました。ハイモの言葉を聞いて、ある聖句を思い出しました。長年の間、わたしが理解に苦しんだ聖句です。「…あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」（ルカ 14 : 33）。

キリストの弟子になるというのは、キリストの配下になるということ。クリスチャンになったと公言しながら、自らの権利を主張することもできます。しかし、キリストの弟子になることはできません。なぜなら、キリストがすべてのものの主、すなわち所有者であられるからです。キリストの弟子となったクリスチャンだけが、世の人々に証をすることができるようになります。なぜなら、自称クリスチャンと真の弟子の違いは、必ずその人の行いに表れるからです。ハイモは、「もし畑の所有権を取り戻したら、先生は再び怒りっぽい白人になって、クリスチャンではなく

なるんですよね」と言いました。私は、「ハイモ、その通りだから、その事を村人に伝えてもらえないだろうか」とお願いしました。

ハイモは両手を挙げて人々の騒ぎを鎮めてから、演説を始めました。「皆の衆、聞いてくれ。先生がクリスチャンになって以来、みんなに対してとても親切になっただろう？もし彼が畑の所有権を取り戻したら、またまたいやな奴になってしまうぞ。所有権の問題は、そのままにしておけばいいではないか？」それを聞いた村人たちは、「ハイモ、お前も頭がおかしくなったのか？先生の神様が畑の所有者だと、俺たちは死んでしまうぞ。お前も飢えて困るだろう？」と言って、今度は彼に向かって怒っていました。するとハイモは、「畑のそばを通過して、パイナップルを盗まずにいられない人は、別の道を通ればいいだろう？必ずしも、この道を通らなくてもよいのではないか？」と提案しました。彼の言わんとするのは、もしもアルコールの問題を抱えている人がいれば、その人は飲み屋の近くを通るべきではない、ということです。彼は続けて、「畑のそばを通らなければ、パイナップルの匂いがすることもなく、パイナップルのことが全く気にならなくなるだろう？先生の神様に畑を所有させておけば、先生はクリスチャンでいられるんだから」と言いました。

私は彼に、「ハイモ、私はクリスチャンになれて嬉しい。だから、クリスチャンでいさせてくれ」と言って訴えました。ハイモも、「先生は、心底クリスチャンになりたがっているのだから、そうさせてあげようじゃないか」と力説しました。村人たちは再び鼻をこすり始め、懸命に考えているようでした。私は黙って、事の成り行きを見守っていました。

とうとう一人の男が、「先生、先生の神様は、暗闇の中でも見えるのか？」と質問しました。私は、「その通り、神様は暗闇の中で

も見える」と答えました。それはまさしく、彼らが全知全能の神について抱いた、最初の悟りのようなものでした。またそれは、彼らのうちに罪の自覚が生じた兆候でもありました。暗闇の中でも見える神は（ほとんどの罪は暗闇の中で行われます）、すべてをお見通しであられるから、神を欺くことは決してできないことを、理解し始めたのでした。

別の男が、「先生の神様は、大きい神様か？」と尋ねました。私は、「その通り、とてつもなく大きい神様だよ。彼は雨を支配し、君の奥さんが妊娠するかしないかを左右し、川の魚も、野の獣も、すべてを支配しておられる。神様の助けがなければ、息もできなくなる。神の生命力が注がれなければ、みんな死んでしまうんだよ」と答えました。男は感心した様子で、「ああ、本当に大きい神様だ。もう、神様のパイナップルを盗むのはやめる」と言いました。恐怖心に駆られて、群衆の半分はパイナップルを盗むことをやめる決心をしました。神に対する恐れを抱くことにより、人は回心へと導かれます。

群衆の半分は、なおもパイナップルを盗み続けました。ところが、不思議なことが起こり始めました。パイナップルを盗まない決心をした人たちは、次から次へと私のところにやって来て、「先生の神様は大きすぎるから、もうパイナップルは盗みませんよ」と宣言しました。私は、「それは良かった」と言いました。その人たちは、真理の御言葉にも心を開くようになり、キリスト教に改宗していきました。

ある朝早く、彼らは私を起こして、「先生、外に出てきて下さい」と促します。出てみると、たくさんのパイナップルが家の前に並べられています。彼らは、「パイナップルを家の中に入れて下さい。パイナップルを盗むのは、良くない事です」と言いました。その

時分かったのですが、教会に加わった青年たちが交替で、パイナップル畑を昼夜見張っていたそうです。私が眠っている間に、彼らは無報酬で、自主的に畑の見張りをしてきていたのです。全く信じられませんでした。本当に神様は、ご自分の財産を上手に管理なさるお方であります。結局、パイナップルは青年たちと仲良く分けました。そして、みんなで神様に感謝の祈りを捧げました。

パイナップル畑を神に明け渡してからというもの、私は畑にほとんど足を運んでいませんでした。雑草が伸びて、抜かなければいけない状態にあることも知りませんでした。最初私は、畑は神様の所有だから、神様が自分で雑草も抜けばいい、とっていました。しかし、それは間違いでした。神様が所有者で、私はマネージャー、つまり管理人として働くべきなのです。

その後私は、バナナの木も神様に捧げました。神様は、バナナも驚くほど上手に栽培なさいます。木が倒れそうになるほどの大きな実をつけたのです。それから、農作物はすべて、神様に捧げました。いつしか、輸出できるほど果物があふれていました。物資を運ぶ飛行機が来るたびに、来た時よりも多くの物資（果物）を載せて、他の地方にいる宣教師たちのところに届けました。他の宣教師たちは、「あんなに立派な果物を、どこで手に入れたんだ？ どうして君だけが、パラダイスのような場所に派遣されたのだ？ 不公平ではないのか？」とやってきました。果物の木を神様に捧げるまで、あそこはパラダイスでも何でもありませんでした。宣教師たちは、「原住民たちが果物を盗むのを、どうやって防いでいるのだ？」と尋ねてきました。

私の答えはこうです。「あなたの持ち物を、神様に捧げなさい。神様は、ご自分の持ち物を上手に管理なさいます」。そして私は、

すべての権利を放棄し、神様に明け渡すことについて自分の経験から彼らに話すことができました。

ところで、パイナップルを盗み続けた人たちが、どうなったと思いますか？盗みを働いた人には、必ず何か良からぬ事が起こりました。家族の誰かが病気をしたり、家が火事になったり、家畜が死んでしまったりと、何かが起こりました。神様が、彼らにプレッシャーを与えておられたのです。泥棒をやめない人には、教会の青年たちが、「君は、先生の果物を盗んでいるだろう？だから、こんなことが起こるんだよ。先生の神様は、大きい方なのだから」と言って回っていたそうです。

いつしか、盗みを働いていた連中は恐怖に襲われるようになりました。泥棒するたびに、災いが起こったのです。ある朝、私の家の前に、バナナやパイナップル、またその他の果物がぎっしり置かれていました。盗んだ人たちが、呪いが解かれることを願って、盗んだ果物を返してあったのです。果物だけではありません。これまで盗まれた物が、次から次へと返ってきました。とても、現実とは思えないほどでした。そういったプレッシャーのために、もはや誰も私たちの物を盗まなくなりました。挙句の果ては、雑草を抜いてくれる人を雇おうと思っても、怖がって畑に入ろうともしません。

ある時、休暇で家を留守にすることになったので、「畑でなる果物は、何でも好きなだけとって食べなさい。腐らしてしまっっては、もったいないから」と伝えたのに、三週間後に戻ってきたら、果物が木の下で腐ったまま放置されているではありませんか。「どうして食べなかったんだ？」と尋ねると、彼らは、「先生は食べると言ったけど、先生の神様はそう言ってないかもしれない。大きい神様だから」と答えるのです。今となっては、果物を処分するの

に苦労しました。輸出できるほど、果物が溢れていました。皆さんの持ち物も神様に明け渡してみてください。決して不足することはなくなります。

神様が教えようとしておられる教訓を学び取るのには、時間がかかりました。その後も神様は、畑の作物や持ち物だけでなく、私の時間、私の評判、私の計画、私の家族、自己、健康、お金、音楽など、生活のあらゆる方面における（自分のものだと思っていた）権利を明け渡すように、求められました。一つひとつの教訓を学び取るのは、まるで学校で、一年生から二年生へ、二年生から三年生へと進級していくようなものです。「自分のものとして保持しておくことのできないものを与える人は、賢明である」と言った人がいましたが、私は逆説的に、「自分のものとして保持しておくことのできないもののために躍起になる人は、愚かである」と言いたいと思います。

ようやく持ち物に固執することをやめ、すべては神のものであると悟ることができたと思ったら、つまり第一学年を修了するや否や、神様は、私を第二学年の課程へと導かれました。原住民が次から次へと私のところに押しかけ、いろんな物を修理してくれとせがむのです。おかげで、多くの時間が奪われました。再び、いらいらの日々が続きました。修理を頼まれても断ればいいじゃないか、と皆さんは思われるでしょうが、私も一度それを試みました。

ところが、かえって問題が大きくなり、夜眠ることができないほどの窮状に陥ったことがあったのです。大切な時間が盗まれていくと感じた私は、心身ともにまいってしまいました。しかし、時間も神のものであることを悟って以来、時間も祭壇にささげることにしました。そうしたときに、この試練もまた、大きな祝福

に変わったのです。

ある試練によって、私の評判が危うくなったこともありました。神様は、ある出来事を通して、私の評判が落ちることをお許しになりました。宣教師を辞めなければならなくなると思ったほどです。しかしその後、私は自分の評判も神様に明け渡しました。すると、私は伝道地全体の長に任じられることになり、指導者に抜擢されたのです。心へりくだる者を、神様は引き上げてくださいます。他人が私のことをどう思うかよりも、神様との関係の方が重要であると考えることができたためでした。

ある時には、子供が病気になり死にそうになったことがありました。医者がおらず、何の医療も受けられない状況でした。万事休すと思われたところで、子供を神様に明け渡す決心をしたわけです。その結果、子供はいやされましたが、八方ふさがりになるまで待つ必要はないのです。今すぐに、生活のあらゆる方面を、神様に支配していただいては如何でしょう。

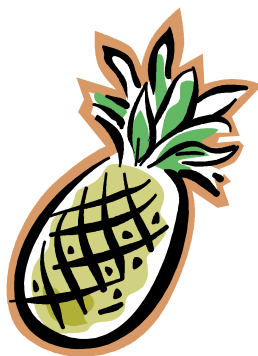
健康に関しても同様です。健康になる権利を神に明け渡した時に、神のいやしを体験することができるのです。神様に向かって駄々をこねたり、不平不満を言ったりするのではなく、あらゆる方面における自らの権利を喜んで明け渡すならば、はるかにめざましい成果を上げることができるのです。ですから、権利を放棄して喜び、神様の方法に任せましょう。神様は私たちの心の願いをご存知ですから、神様の定められた時に御業を行っていただきます。健康になる権利を明け渡していやされた人を、私は何人も見てきました。

私自身は、試練に遭うたびに最初は奮闘し、自分の力で問題を解決しようとしていました。結果は悲惨なものです。懸命にもがけば

もがくほど、深みにはまって出られなくなります。

神様は、私たちの問題を解決する方法をお持ちです。皆さんが自分の方法で解決しようともがいている間、神様は介入なさいません。あなたが神様の方法に委ねるのを、忍耐強く待っておられるのです。かつての私のように、もがいている人はいませんか？その結果、心身の健康を損ねている人はいませんか？そのような人は今、神様にこう言っていただきたいのです。「主よ、私をお赦してください。私の畑をあなたにお捧げいたします。あなたの方法で管理して下さい」と。権利を明け渡す献身の祈りは、日ごとに捧げるべきものです。

日ごとに罪の赦しを請い、自らの権利を神様に明け渡すのです。そうする時に、心配と恐れは消え、怒ることもなくなります。解放されて自由になり、喜びに溢れる日々を送ることができるようになるでしょう。「天路歷程」のクリスチャンのように、十字架のもとで重荷が取り去られ、肩の荷が軽くなった状態で、天国への道のりを歩むことができるようになるのです。





神の居住区で生活する

宣教師がヨブのような苦境から学んだ大教訓。
保険社会が神への信頼を希薄にする危険！

私たちが学ばねばならない人生の大切な教訓は、しばしば困難な状況において会得されます。困難な苦しい状況においてこそ、私たちは教訓を最大限に学び取るようであります。

伝道地から帰っても更なる試練

私たち家族が、伝道地(パプアニューギニア)から帰国した頃の事です。妻のキャロルは肝臓の病気を抱えていました。伝道地における最後の一年間、彼女の病気は悪くなる一方だったので、とうとう家族全員で帰国しなければならなくなったのです。

帰国するや否や、他にも問題がいくつも出てきました。帰国した時の私たちの持ち物と言えば、各自のスーツケースだけでした。四人の育ち盛りの子供がいながら、冬に着る服もなく、自動車も住む家もなく、着の身着のままも同然でした。カナダの出身教会からは、「ここは経済状態がひどいから、帰ってくるな」と言われました。家内の出身教会は閉鎖してしまい、彼女の両親もフロリ

ダに引っ越したばかりでした。行く当てもなくなった私たちでしたが、結局オハイオ州のマンズフィールドに落ち着くことになりました。私たちはそこのメンバーでも何でもありませんでしたが、マンズフィールドの教会の人たちが、親切にも私たちを受け入れてくれたのでした。

ところが、マンズフィールドに用意してもらった住宅は、理想的な住まいと呼ぶには無理がありました。備え付けの家具は、どれも古びていました。息子は座っているとき、椅子を後方に傾ける癖があったのですが、そうすると脚が外れて椅子から落ちてしまいました。いかにも、「宣教師邸」と呼ぶのにふさわしい住まいでした。長い間空き家になっていた家で、窓の老朽化がどれも著しく、子供たちが開け閉めすると、窓枠が壊れ、外れてしまう有様でした。網戸も、ことごとく落ちかかっていた。正真正銘の「宣教師邸」でした。私はこう思うんです。通常、不便な生活を強いられる未開の伝道地から祖国に戻ると、先進国の便利な生活を居心地良く感じますよね。ところが、いわゆる「宣教師邸」に住ませれば、あまりのひどさに伝道地を懐かしむようになる。こうして、宣教師たちが伝道地に戻りたくなるようにもくろまれたのが、「宣教師邸」ではないかと。



さらに、私と入れ替わりで伝道地に赴こうとしていた別の宣教師仲間に、「僕の愛車を六百ドルで買ってくれないか」と頼まれました。お人好しの私は、その車を買う羽目になってしまいました。ただでも欲しくないほどの、オンボロ車でした。私の人生で、最悪の割に合わない買い物でした。あれはまさに、走る「騒音公害」でした。おまけに、いつ止まってしまうか分かりません。少しは

いい事もありました。寄付集めに貢献してくれたんです。教会の前に駐車するときは、しばらくエンジンをかけっぱなしにしておきます。教会に来る人たちは、いやでもあの、今にも爆発しそうな音を聞かされるわけです。いつ壊れてしまうか分からない状態でした（実際にたびたび故障しました）。同情した人たちが（同情はしても、誰も同乗したがりません）、「修理代のたしにしてください」と言って、いくらか寄付をしてくれるのです。そのうち、家内も自動車が必要になりました。

教会員の一人が、「使っていない車があります」と言って、一台寄付してくれました。これもまた、最初の車に負けず劣らずのオンボロでした。私が教会に出かけるときは、調子の悪い方を運転して行きます。親切な教会の人たちは、車の調子が悪くなるたびに寄付金をくれましたが、全額を修理代にまわす余裕はありません。子供たちの衣類も買わなくてはなりません。私たちは本当にお金に困っていて、生活のあらゆる面で物質的に欠乏し、きゅうきゅうとした日々を送っていました。おまけに家内は肝臓を患っていて、床に臥していることの多い日が続いていました。

子供たちが世俗化する悩み

私たちは物質的な欠乏に苦しんでいただけでなく、家族の問題も抱えていました。子供たちは、教会の学校に行かせていたのですが、長男が不良の友達とつきあうようになり、マリファナを吸って退学処分を受けてしまいました。親として、当然私は非常に心を痛めました。おまけに娘はチアリーダーのクラブに入って以来、とても反抗的になり、あからさまに家の食事にけちをつけるようになりました。貧しいながらも最善の食事を子供に食べさせようと努力している親に向かって、「マクドナルドの方がましだ」

と言うのです。

第一に物質的な問題、第二に家族の問題、そして第三に健康の問題がのしかかってきていました。私自身も、様々なストレスが原因で、再び健康を損ないかけていました。帰宅するたびに、「あっちが壊れた・・・こっちが壊れた・・・お父さん何とかして」と言われます。私は、手が器用な方ではありません。専門家に修理を頼むお金もないので、しばしば途方にくれました。一方、教会では、「勝利のクリスチャン生活」といった集会を催していたりするわけです。家の外では調子のいい事を言っている、ひとたび我が家に戻ると、何もかもうまくいっていない現実が待っています。家に帰りたくなくて、集会を長引かせたこともたびたびありました。病気がちの妻、反動的な子供たち、倒壊しかかった住宅。無論、現実から逃避するわけにはいきません。でも家にいたら、あれもこれもしなくてはならないので、落ち着いて祈ることもできません。そこで私は、一人で近くの公園へ行き、ベンチのそばで祈り、そこに座って聖書を読むことにしました。



ヨブの経験に励まされる

ある日私は、公園でヨブ記を読んでいました。読んでいるうちに、ある事にとっても驚きました。ヨブも、私と同じような問題を抱えていたことが分かったのです（本当は、私がヨブと似たような問題を抱えていたわけですが・・・）。第一に、ヨブはすべての持ち物を失いました。つまり、物質的な問題です。第二に、子供たちを失い、彼の妻は信仰を失いました。つまり、家族の問題です。第三に、彼はひどい腫れ物に襲われました。つまり、健康の

問題です。自分がヨブと共通の問題を抱えていることを知った私は、さらに深くヨブ記を研究するようになりました。まず分かったのは、ヨブがサタンの標的になっていたということです。サタンはヨブが大嫌いでした。サタンは私も大いに嫌っていて、それはいい事なのだ、と思いました。

家内が病気になった頃、ニューギニアでの宣教活動はとてもうまくいっていました。あちらこちらの部族の原住民たちが、次から次へとキリスト教への改宗を表明し、どうしても国に帰りたくはなかったのです。ですから、家内が速やかにいやされるよう祈りました。しかし、どうやら神様は、別の計画をお持ちであったようです。家内の病気が良くならなかったのも、帰国を余儀なくされたわけです。

ヨブの話に戻りますが、彼はとても裕福で、「東の人々のうちで最も大いなる者であった」と書かれています（ヨブ 1:3）。同じ節に、「その家畜は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭」と書かれていますから、つまり物質的に最も裕福な人であったわけです。それだけでなく、神様もヨブのことを高く評価しておられました。彼は神の御前に「全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者」と評されています（ヨブ 1:8）。ヨブは敬虔なクリスチャンであり、家族にも恵まれ、おまけに非常な財産家であったという、三拍子そろった理想的な人物でした。彼ほどの財産家であれば、当然有名人であったはずですが。そのような人をやっつければ、皆の語り草になるであろうことを、サタンは知っていました。ですから皆さん、私たちは教会の指導者のために祈らねばなりません。時には、指導者でも倒れることがありますよね。大物をやっつけば、多大な影響を及ぼすようになることをサタンは知っているのだから、指導者層を特に激しく攻撃します。

ヨブはサタンの標的でした。あくまで私の想像ですが、ヨブの農園を行きめぐったサタンは、膨大な数の家畜としもべたちを目の当たりにし、幸せそうな十人の子供たちを見て、嫉妬したのではないのでしょうか。「どうにかして、あいつの人生をめちゃめちゃにしてやりたい！」と思ったのではないのでしょうか。しかしどういうわけか、サタンはヨブに手を出すことができませんでした。ヨブの回りにはくまなく、まがきが設けられていたからです（ヨブ 1:10 参照）。ヨブの持ち物はすべて守られており、彼の権威の下にあったすべてのものは祝福されたのでした。ヨブのしもべとして働いたり、彼の子供であったりすることは、大きな特権であり祝福であったはずです。なぜなら、ルカ 11 章の 21 節に、「強い人が十分に武装して自分の邸宅を守っている限り、その持ち物は安全である」と書かれているからです。強い人が自分の管轄区にいて目を光らせている限り、敵は手を出すことができません（マタイ 12:29 も参照）。人々を破滅させようとつけねらっているサタンと悪霊どもの立場を説明して、この聖句が述べられています。

この原則は、いかなる組織、命令系統にも当てはまります。軍隊であれ、会社であれ、学校のクラスであれ、家族であれ、指揮官がまがき〔垣〕を確保していれば、彼の管轄化にいるすべての者は安全なのです。サタンはそのまがき、すなわち権威構造を尊重しなければなりません。神様が設けられたまがきであるため、彼はそれをむやみに乗り越え、内部で暴れ回ることはできないのです。パプア・ニューギニアで、私たちは鶏を五羽飼っていました。肥えた立派な雌鶏たちで、食料となる卵を産んでくれました。ところが、おなかをすかした野良犬たちが鶏を付け狙っているのです。私は頑丈な小屋を建てて、鶏たちを守ることにしました。犬たちは、



何とかして鶏を餌食にしたいくて、いつも小屋の周りをうろうろしていました。小屋のてっぺんによじ登ったり、穴を掘って下から侵入しようとしたり、彼らも必死でした。この様子はちょうど、ヨブの農園を行きめぐっているサタンに似ているなと思いました。「ああ、どうにかして、あいつの家畜の一頭でも傷つけることができれば・・・」と言ってくやしがっていたのではないのでしょうか。ところが、ヨブ記の1章で、神様とサタンの会談が行われるまで、サタンはヨブに指一本も触れることができませんでした。この事が、私にとって大きな慰めになりました。まず、この事をあらゆる時代の人々に教えるために、ヨブ記が記されたと私は考えています。神様のまがきが私たちの周りにある限り、サタンは私たちに危害を加えることができないのです。皆さんはその事を信じますか。これは全くの真実であります。

あの会談が行われたときに、神様の方から議論を仕掛けられます。「お前が地を行きめぐっていたときに、わたしのしもべヨブを見たか？」と。これはあたかも、サタンの生傷に塩をすり込むようなものであったことでしょう。「ああ確かに見ましたよ。見ましたとも。でもそれは、あなたが彼の周りにまがきを設けられたからではありませんか」といった具合に反論しています。神様は、サタンがヨブを付け狙っていたことをご存知でした。そして、ヨブと彼の管理下にあるものを、ことごとく守っておられました。サタンからその事を指摘されたとき、神様は否定なさいませんでした。

聖書の他の箇所を見ても、神様がまがきを設けられることが分かります。例えばホセア書1章では、ホセアの妻の周りにいばらの垣が建てられました。またイザヤ書5章には、まがきを取り去られたブドウ畑のことが書かれています。いずれにしても、まがきというのは、神の保護の象徴であります。そのまがきを取

り去ったら、ヨブは神を呪うであろう、というのがサタンの主張でした。「いや、そんなことはない」と神様は言われ、「いや、きっとそうなる」とサタンは言ったわけです。ついに、サタンからの挑戦状が受理され、神様はヨブに関するご自分の主張を証明することになりました。「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にかかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」(ヨブ 1:12)。神様から許可をもらった時のサタンの喜びようが、想像できますでしょうか。聖書のこの部分も、ある真理を示しています。

神様の許可なくして、サタンは私たちに指一本触れることができません。私はどこに行っても、「ヨブが神から受けた仕打ちを、私は受けたくない」と言う人に会います。ヨブに危害を加えたのは神様ではなく、サタンでした。神様がなされた事は、まがきを取り除いただけでした。ただ、そのためにサタンはヨブに危害を加えることができるようになりました。神様のまがきが除かれたら、サタンはその機会を決して逃しません。ヨブを破滅させるために、できる限りのことをしました。まがきがなければ、私達も同様の目に会うことでしょう。ヨブの場合、まがきが部分的に取り去られたのか、それともある程度低くされたのか、それは皆さんの想像で構わないと思いますが、いずれにしましても、ヨブの所有していたものがすべて、サタンの手にかかってしまいました。

神が愛なら
なぜこんな
ことが!



一日のうちに、彼はほとんどのしもべたち、すべての家畜、そして十人の子供たちまでも失ってしまったのです。かつては東洋一の裕福な人物が、一日にして無一文になってしまいました。保険もかけていなかったの

で（当時、保険なんていう制度はなかったはずです）、本当にすべてを失ったのでした。子供たちも、全員死んでしまったのです。いっそのこと、妻もいなくなってしまうえばよかったのに、と思ったかどうかは別にしまして、残ったのは彼と妻の二人だけでした。ヨブの妻は、彼にいやみを言うだけでした。「神を呪って死になさい」と。何という棘のある言葉でしょう。彼女も子供たちと一緒に死んでしまったほうが良かったのに、と私なら考えただろうと思います。しかし、ヨブの妻が悪態をついたのは無理もないことです。一日に十人の子供を葬って、正気を保つことのできる女性果たしているのでしょうか。おまけに、夫の財産までなくなってしまう、全国一貧乏な女に成り下がったのですから。そう考えれば、彼女を責めることもできませんよね。

興味深いことに、ヨブの健康はまだ損なわれていませんでした。神様がお許しになる以上に、サタンは危害を加えることはできません。これは大事なポイントです。命に至る道に私たちを連れ戻すため、私たちが辛い試練にあうことを神様はお許しになるかもしれませんが、決して必要以上の苦しみに会わせることはありません。ですから、サタンを恐れる必要はないのです。私たちは、神様の囲いの中にいます。大切なのは、その中に留まることです。

さて、神様とサタンの二度目の会見が行われました。再び、神様の方から話しかけられます。「あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」（ヨブ 2:3）。ヨブ記には、彼がどれほど高潔ですぐれた品性の持ち主であったかが、三度にわたって述べられています（1:1; 1:8; 2:3）。これまで地上に存在した人の中で、最も偉大なクリスチャンの一人であったと言えるでしょう。当然、あのような災いを受けるに

値する人ではありませんでした。私たちにさらなる大切な教訓を与えるために、ヨブがさらに激しい試練にあうことを神様はお許しになりました。

サタンは反論して次のように言いました。「皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしいま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃つてごらんさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」(2:5)。そこで神様は、彼の肉体に触れても良いが、生命を奪ってはならないと言われました。これはつまり、まがきがさらに除かれれば、サタンはさらにその人を傷つけることができるようになるということです。神様のまがきが少しでも残っている限り、サタンはその人の生命を奪うことはできません。どんなにヨブの肉体を傷つけても、彼を殺すことはできないことを、サタンは知っていました。神様もその事をご存知でした。しかしヨブは、もうじき自分は死んでしまうのではないかと思いました。友人たちも、彼はもう長くないだろうと考えました。彼の妻は、「神を呪って死になさい」と言います。ところがサタンは、自分ができる事には限界があることを知っています。なおも、すべてを支配しておられるのは神様だからであります。

ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の体の腫物をかきながら、灰の中に座っていました(2:8)。その哀れな姿を想像してみてください。あれほどの絶望的な状況にありながら、彼は、「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる」(19:25)と告白したのです。何という信仰の持ち主でしょう。「たとい彼が私を殺しても、なおも私は彼を信頼することでしょう」(13:15 欽定訳)。順境のときにも、逆境のときにも、神に対する彼の態度は変わることがありませんでした。これこそ、真の信仰であります。

苦しい時期に、公園のベンチにすわってヨブ記を読んでいた私は、まず、自分の試練がヨブの試練に到底及ばないことを悟りました。それから、彼の周囲にはどうやってまがきが築かれていったのかを考えました。彼は品性において完全で、清い生活を送り、常に潔白な良心と正しい動機を持っていました。これらは自分自身との関係における特性でした。さらに実直かつ公正で、情け深く、豊かな愛情の持ち主でした。これらの特性は、他の人々との関係において際立っていましたが、神との関係においては、神を畏れ、こよなく敬愛していました。

さらに第四の関係がありまして、それはサタンとの正しい関係であります。それはサタンを憎むことなのですが、つまりヨブは、罪を非常に憎んでいました。ヨブは、これら四つの関係—自分自身、他の人々、神、サタンとの関係—を正しいものに保っていました。それが、あらゆる服従の本質であります。これら四つの関係を正しいものにする、それが完全な服従であり、ヨブはそのような服従を生活において実践していました。そのような服従の故に、神様の祝福がヨブに臨み、まがきが設けられていました。ヨブの管轄の下においては、すべてが祝福され、繁栄しました。

その事を知った私は、悔悟の念に満たされました。これら四つの関係を正しく保つことがまがきを築いてくれるとしたら、私が苦境に立たされているのも無理はない、と思いました。もしも私が、これら四つの関係において清くて正しいことを示していたら、状況ははるかに好ましくなっていたはずです。私の動機は不純なもので、実直な生き方からは程遠いものでした。自分のオンボロ車を利用して、寄付集めをする姑息なやり方を反省させられました。また、時には平気で祈りを怠る自らの私生活を省み、神を畏れる思いに満たされたのでした。そして、私は自分が憎むべきほどに罪を憎んでいない、と思いました。公園にいた私は、罪を悔

いてその場にひれ伏し、泣いて祈りました。「ああ神様、私の周りにはまがきがないのですね。私のせいで、妻と子供たちに保護の御手が及んでいないのですね。私の持ち物がことごとく祝福されないのも、私に非があるからです」。けれども、かつてはこのように祈っていました。「神様、私がこれまであなたのためにしてきたことをお忘れですか？」と。無論、このような手に引かかる神様ではありません。今や、神様が私のことをどのように考えておられるかが分かってきました。

以来、毎朝のように公園にやってきては、自分の罪深さを悔い、泣いて祈りました。そして、これら四つの関係を修正しようと努めました。そうしたらすぐに、すべてがうまくいき始めたと言った皆さんに申し上げたいのですが、そうではありませんでした。修正の過程はととても遅く、ゆるやかなものでした。しかし、その年の秋には、私の長男が教会の伝道キャンプに参加し、その機会を通して回心し、以来、伝道者として生涯を主にささげる決心をしました。神様が、彼を変えてくださったのです。また、家を出される食事に文句を言っていた娘が、ある日突然、「この食事は体にいいのよね」と言うではありませんか。私は自分の耳を疑い、危うく、持っていたスプーンを落とすところでした。彼女は続けて、「チアリーダーをしていて、自分の健康管理のためには、我が家の食事が一番だと分かったの」と言いました。それだけではなく、子供たち全員の態度が変わってきたのです。ちょうどその頃、例のオンボロ車の代わりに、さらに良い自動車を与えられました。神様は、必要に応じてどんな自動車でも与えることがおできになります。さらに、借家ではありましたが、もっといい家に引っ越すこともできました。少しずつではありましたが、状況が変わってきました。その変化は、私にとって大きな祝福でした。



引越し先は、オハイオではなくミシガン州でした。ミシガン通りという大きな道路沿いでしたが、家の裏には小さな森がありました。実は、その森の向こうに、貧困者層の住むあまり好ましくない住宅地がありました。そこでは、麻薬やその他の犯罪が横行していました。警官とギャングの両方が常に出入りしている区域でした。ある日、私は末の息子チャールズと一緒に、地下室へと通じる階段の上に立っていました。

私たちは、ある物を修理しているところでした。ちょうどその時、私たちの家と例の住宅地の間にある森に雷が落ち、そこに設置されていた変圧器に稲光が当たったのです。その変圧器に当たった火の玉のような電光が、どちらの方に向かったと思いますか。反対側にいる邪悪な人たちのところへ行くべきですね。ところがその電光は、善良な伝道者の住まいを襲ったのです。電線をつたって文字通り火の玉が我が家にやってきて、家の壁にかかっていた電気メーターを爆発させてしまいました。レンガの壁には、大きな焦げ痕が残りました。配電盤も真っ黒に焼けてしまいました。その結果、家の中のすべての電球と、コンセントにつながっていたすべての電化製品が壊れてしまいました。どれも真っ黒焦げです。全く信じられないような光景でした。びっくり仰天した私と息子は、すぐに階段を駆け上り、被害状況を調べるためにメーターのところへ行きました。するとその時、再び雷が同じ所に落ちたのです。瞬時にして火の玉が再び襲ってきました。息子が、「お父さん、危ない！」と叫びました。ここには危険だと分かり、私はすぐにそこから逃げようと思いました。ところが爆発の

衝撃に押されて（それはまるで巨人の平手打ちを食らったような衝撃でした）、気がついたら、私は裏庭に立っていました。家の中から外に吹き飛ばされたわけです。吹き飛ばされたというよりは、無理やり押し出されたと言う方が適当かもしれません。電光に襲われる前と同じ姿勢で立っていたのですから。



家の中から息子の叫び声が聞こえてきました。「お父さんが消えてしまった！」急いで家に入り、「チャールズ、お父さんは大丈夫だ。君は大丈夫か？」と尋ねました。息子は興奮した様子で、「お父さん、バスケットボールよりも大きい火の玉が、僕の足のすぐそばを通り過ぎて、地下室に下りて行ったよ」と言いました。地下の家族部屋では、二人の娘がソファーに座っていました。娘たちの報告によると、火の玉は二人のすぐ前を通り過ぎて、部屋の隅にあったランプに当たったそうです。その時は、あまりの驚きと恐怖に、声も出なかったようです。私たちは、二度も続けて天災に見舞われたのです。

その日の晩、私は寝室に入ってひざまずき、次のように祈りました。「神様、お話ししたいことがあります。あなたは二度も、恐ろしい火の玉を私たちに送られましたね。方向が間違っていたと思います。あれは、あそこの連中に向けられるべきものではありませんでしたか？」ところが神様から、「方向は正しかった」と言われたような印象を受けました。しかし、私も負けてはいません。「神様、おっしゃることが分かりません。私に何を伝えようとしておられるのですか？私はすべてを失いました。もうこれ以上、失うべきものはないはずです」。しかし祈っている間に、神様からのメッセージがだんだん鮮やかになってきました。私は、正しい道からはずれていたのです。

皆さんも、道からはずれることがありますか。私たちをこよなく愛されるが故に、私たちを連れ戻すために、神様が何をなさるかご存知ですか。火の玉を送ることによって、私に触れ、私の目を覚まさせようとなさったのです。再び本心に立ち返った私は、先述した四つの関係のどれを損ねたかを悟りました。そして、まがきを取り去られていたことに気づいたのです。どうしてですか？それは、私自身がまがきの外にさ迷い出てしまったからでした。放蕩息子のようにまがきの外にさ迷い出てしまうと、様々な苦しみに遭うこととなります。サタンは私たちの弱みに付け込んで、その弱い点から私たちを崩していこうとするのです。まさに、その事に気がつきました。

そしてさらに、突然ある事をも悟ったのです。神様は、私の物質的な領域、つまり A の領域に触れられました。ヨブも最初に物質的な財産を失いましたね。B の領域は？・・・家族です。ヨブは家族も失いました。そして C の領域が、健康です。神様は、私をご自身に立ち返らせるために、私の A の領域に触れたのです。そう考えると、感謝の念が沸いてきました。「神様、被害が物質的なものだけであったことを感謝します」。我が子を取り去られるよりは、愛車を取られるほうがずっとましですよ。健康を失うよりは、家を失うほうがましです。

電光によって裏庭まで押し出されたにもかかわらず、かすり傷一つ負いませんでした。神様に向かって、「私の健康を守ってくださったのですね」と言いました。また、火の玉が子供たちのそばを通り過ぎたにもかかわらず、三人とも無事でした。「神様、私の子供たちも守ってくださったのですね。私の健康は損なわれず、家族も無事であったことを感謝いたします」と祈りました。確かに、家の中の電気系統はめちゃくちゃになり、電化製品の多くが壊れてしまいました。どれも、取り替えが可能なものばかりです。

それから、こうも祈りました。「神様、私が正しい道からはぐれたときには、いつでも私の所有物を取り去ってください」と。

自分自身の神との関係を修復

こうして私は、再び神様との正しい関係を回復することができました。そのために、主を讃えたいと思います。これらの出来事を振り返って思うのは、神様は私たち一人ひとりをこよなく愛しておられるということです。神様ご自身も、私の他の領域に触れるよりは、私の所有物に触れるほうがましだと考えておられます。親が自分の子供を扱う場合も、同じではないでしょうか。道を誤っている我が子が立ち返ってくれるならば、叩いたり懲らしめたりして、少しだけ痛い目にあわせるほうが良いと考えるはずです。神様の私たちに対する愛は、私たちが自分の子供に対して抱く愛情にまさっています。道を誤っている私たちを立ち返らせるために、できれば私たちの物質的な領域に少しだけ触れて、私たちを懲らしたいと考えておられるのです。

主は、羊飼いに譬えられていますね。群れからはぐれた一頭の羊をも捜しに出かけていく、優しい羊飼いです。夜中に、いばらの茂みに引っかかって動けなくなった羊を見つけると、けがをしないように注意深く救出してやり、優しく抱きしめて家に連れ帰ります。愛情に富み、柔和で情け深い羊飼いいーそれが私たちの神様です。ところが、その羊が懲りずに何度も群れからはぐれようとするならば、羊飼いはどうすると思いますか。羊の脚の骨を折ってしまうのです。そして、骨折した脚が回復するまで、羊飼いはいつも自分のそばにその羊を横たわらせて介抱してやります。骨折が治るころには、羊飼いの声を聞き分けることができるようになっていて、決して群れからはぐれなくなります。神様も、も

し私たちが懲りずに何度も道を誤るならば、やむを得ず脚の骨を折るかもしれません。つまり、健康または家族が損なわれるのをお許しになるかもしれないということです。

保険問題と信仰

もう一点だけ、私たちの国（米国）で問題になっていることについて申し上げたいと思います。それは、保険の問題であります。私たちはAの領域、つまり物質的な財産、所有物に保険をかけます。Bの領域である家族、またはCの領域である健康に保険をかけることはできません（健康保険、ガン保険、入院保険といった、健康に保険がかかっているように思われるものもありますが、実際は病気になってから、医療費の一部または全額を免除してもらえるだけで、健康保険に加入したからといって、健康が保障されるわけではありません。生命保険、傷害保険などのたぐいも同様で、もしもの場合は、金銭という物で保障がなされるだけです。自分自身や家族の生命が保障されるわけではありません）。

この保険というのは世の制度であり、私たちはこの点で世に倣ってしまっているのです。世は神を信仰していません。それ故に、世の人々はできる限りの保険をかける必要があるわけです。しかし、神様を信じている私たちが世の人々に倣って保険に頼るとき、事実上、「神様、私の所有物に関しては、あなたに信頼を置くことができません」と言っていることになるのです。でも、それは間違っていますよね。神様はまがきを設けて、私たちが持つすべてのものを保障することがおできになります。私たちがAの領域を保険にかけると、私たちを正しい道に連れ戻すために、神様はBまたはCの領域に触れなければならなくなるのです。Aの領域である所有物に触れたとしても、保険会社がすべて保障してくれる

わけですから。つまり物質的なものに損傷を与えたとしても、新しい物に取り替えてもらえるので、懲らしめにはなりません。かえって、「ああ、保険をかけといてよかった。実に賢明だった」と考えるようになるでしょう。そして、さらに深く保険にのめりこんでしまうことでしょう。その結果、神様にますます頼らなくなり、ますます人間の制度に頼るようになります。これはまさに、靈的に道を踏み外した状態です。

私たちが主に頼ることを望んでおられる神様は、私たちを連れ戻すために、ほとんど仕方なく、BとCの領域に触れられるわけです。そして、こういったことが、今日のキリスト教会においてしばしば見られるのです。家族の問題、健康の問題を抱えた人があまりにも多いのではないのでしょうか。教会では、「〇〇さんが病気なので、皆で祈りましょう」といった要請はしばしば聞かれます。一方、〇〇さんの結婚関係が危機に陥っているとか、〇〇さんの子供が非行に走っているとか、〇〇さんはお金がなくて、明日の食事にも事欠いているといった問題は、秘される傾向にあります。週に一度、教会で顔を合わせるときは、誰もが笑顔を振りまいているかもしれません。

しかし実際は、多くの人が三つの領域の問題を抱えていて、保険のために、BとCの領域における問題はさらに深刻化しているのです。Aすなわち物質の領域に保険をかけると、家族と健康の領域において、私たちはきわめて無防備になってしまいます。そして、BとCも保険にかけられることができるなら、きっとそうしていただろうと神様は解釈なさいます。たとえ口では言わなくても、「私は神なんか必要としていない」というメッセージが神様に送られるのです。今日、この保険制度は、教会の中で非常に大きな問題を引き起こしています。保険の分野において世と歩調を合わせるとき、私たちが靈的にどれほど無防備な状態に陥るかお分か

神の居住区で生活する

りでしょうか。

この度は、「神の居住区で生活する」と題してメッセージを語らせていただきました。かつて、伝道地に派遣された宣教師たちは、宣教師の居住区というのを設けて、未開地における様々な危険をできるだけ未然に防ごうとしました。「神の居住区で生活する」というのは、神様が設けられたまがきに守られて生きることを意味します。「神の保護区」と言うこともできるでしょう。もし私たちが神の居住区に留まって、神のまがきという囲いの中に居ようと思うなら、私たちは世が提供する保険をことごとく避けるべきであります。これがきつい発言であることは承知していますが、少なくとも、保険は最低限に減らすべきであり、可能な限り避けるべきです。なぜなら、保険に頼ることは、神の居住区から出て生活することを意味するからです。神様がそれをお喜びになるはずはなく、迷い出た私たちを連れ戻すために、別の領域における損失をお許しになるかもしれません。私たちをこよなく愛しておられるからです。

但し、場合によっては、絶対に加入しなくてはならないたぐいの保険があるのも事実です。法律で義務づけられている保険もあれば、仕事の関係上、加入しなくてはならない保険もあります。私たちは、上に立つ権威に従うべきですから、そのような場合は謹んでそれを受け入れ、神様に感謝しましょう。しかしながら、自分から進んで加入すべきではありません。自分で保険のほうを選ぶべきではありません。そのような態度をとるときに、神様はやむを得ず私たちを懲らすことでしょう。どうぞ私の言葉を鵜呑みにしないで、ご自分で確かめてみてください。家族の問題や健康の問題をほとんど抱えていない人たちを探してみてください。そのような人たちが、どれだけの保険に加入しているか調べてみてください。また、家族の問題や健康の問題を多く抱えている人

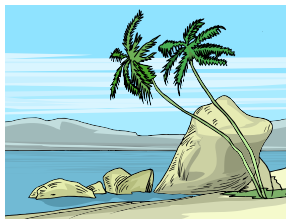
神の居住区で生活する

たちも探してみてください。そして、彼らがどれだけの保険に加入しているか、上手に尋ねてみてください。きっと皆さんは、その調査結果に驚かれることでしょう。

今回のメッセージは受け入れ難いと感じる人には、詩篇 91 篇を憶えていただきたいと思います。

「いと高き者のもとにある隠れ場（これは神の居住区です）に住む人、全能者の陰にやどる人は、主に言うであろう、『わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神』と。主はあなたを狩人のわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である（ヨブの悩みと関連づけて読むことができますか？）。あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。また暗闇に歩きまわる疫病をも、真昼に荒らす滅びをも恐れることはない。・・・あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない。これは主があなたのために天使たちに命じて、あなたの歩むすべての道であなたを守らせられるからである（これがまがきです）。彼らはその手で、あなたをささえ、石に足を打ちつけることのないようにする。・・・彼はわたしを愛して離れないゆえに、わたしは彼を助けよう。彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る。彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。わたしは彼の悩みのときに、共にいて、彼を救い、彼に光栄を与えよう。わたしは長寿をもって彼を満ちたらせ、わが救いを彼に示すであろう」。

どうぞ、この章を憶えてください。そうするとき、「神の居住区で生活する」とはどのようなことかが分かってくるはずです。



神様の学校—権利の放棄

パイナップル・ストーリーでお話ししたように、自分の所有物を神様に明け渡した後、真の喜びが私の心の内にありました。何も持たないところに自由があります。心配の種がなくなるのです。夜もぐっすり眠れるし、精神も安らぎを取り戻しました。実にすばらしい生き方だ、と思いました。

ところが、またまた原住民が私を悩ませました。ある日、「お鍋が壊れてしまったので、直してくれないかしら？」と家内に頼まれましたが、「直す時間がないから捨ててしまいなさい」と答えました。他に新しい鍋があるのを知っていたからです。次の日、原住民の男が私の事務所にやって来て、「先生、ボクの壊れた鍋を直してくれ」と言うのです。その壊れた鍋というのは、前の日に家内が捨てたものでした。私は、「家内のために直さなかったのだから、君のために直すわけにはいかない」と答えました。すると彼に、「先生は俺たちを愛していないんだ。自分の物ばかり直して・・・けちん坊！」と言われてしまいました。私はけちん坊の精神に勝利したばかりでした。事実、どうやってその精神に勝利したか証をしていくくらいですから。私は、「せつかくの証を、そ

んなに早く振り出しに戻さないでくれ。あと十五年ぐらい待って
くれないか」と言いたい気持ちでした。オランダ人にとって、け
ちん坊の精神に勝利するというのは、大変なことなんです。そ
れなのにこの男は、なおも私をけちん坊呼ばわりするのです。時
間を惜しんでいるから、けちだと言うのです。私は彼にこう言
いました。「けちだから断ったのではない。私にはやる事がいっぱい
あるのだよ。翻訳の宿題も残っているし（それが何かは分かっ
ていなかったはずですが）、現地語の勉強もしなければならない。私
には、そんな物を直している暇なんか無いんだよ」。しかし、彼は
執拗に、「先生は俺たちを愛していないんだ。愛しているのは自分
だけなんだ」と言い続けます。真実をついている部分もあるので、
あまり大きなことは言えませんが、私はこう言いました。「君たち
を愛していなければ、このような未開のジャングルに来るわけな
いじゃないか。保養のために来たとも思っているのか？家に向
かいながらこう言いたまえ、『先生は俺たちを愛している。暇がな
いだけだ』と」。彼は私の助言に従うことなく、村中に私の悪口を
言いふらしました。彼のお陰で、私の評判はがた落ちし、伝道の
働きにも支障をきたしそうにな
りました。

私は、鍋を直してあげなかつたことを後悔し、その晩ほとん
ど眠れませんでした。自分に敵
対するようになったあの男に、
どうやってキリストの事を伝え
たらよいだろう、と悩みました。
皆さんなら、自分を憎んでいる
人にどうやって伝道しますか？



「もしかしたら、あの男は、福音に対して生涯心を閉ざしてしま

うかもしれない。そうなれば、永久に失われることになる」と考えたわけです。このように、聖霊が私の良心をちくちくと刺します。私はとても惨めな気持ちになり、眠ることができませんでした。あの男の怒った顔が、まざまざと浮かんできます。「彼の魂が滅びるならば、それは私の責任だ」と考えると、悩みは深まる一方です。そこで、私は次のように祈りました。「神様、明日あの鍋を直しますから、どうか眠らせてください」。このように祈ったら、ようやく眠ることができました。

翌朝、あの男に連絡して、鍋をもってくるように言いました。今度は、彼のほうが当惑しています。昨日は冷たくあしらわれ、帰るように言われたのに、今日になって鍋をもってくるように頼まれたわけですから、わけの分からない白人だと思ったことでしょう。

それから、男にその鍋を持たせて、ハンドルの修理を試みていたところに、家内が現れたのです。新たな問題が浮上しました。家内は、「私のためには直してくれないのに、彼らのためなら直してあげるのね」という捨て台詞を残してその場を立ち去ろうとしたので、私は、「ちょっと待ってくれ。これには深い事情があるんだ。僕はこのために睡眠不足になり、解決のためにはこうするしかない」と、神様がおっしゃるんだよ」と必死で弁明することになったのです。



鍋を修理してもらった男は、すっかり機嫌を直してくれました。

そこで、私は彼にこう言いました。「私は君のために一肌脱いだのだから、君も私のために一肌脱いでくれないか」。彼は、「一体何をするのですか？」と尋ねました。すかさず私は、「君の家族を全員教会に連れてきて、聖書の話をお聴いてくれないか」と言いました。彼には貸しができたので、これでもしかしたら、彼とその家族をキリストに導けるかもしれない、と思いました。奇妙な伝道方法ではありますが・・・

ところが翌朝、大勢の原住民が外に並んで立っていました。彼らは各々、壊れたスコップとか、壊れたナタ、壊れた鍋などを手に持っていたのです。壊れたハーモニカをもってきた人もいました。その男は、「ボクのとつを直してくれ」と言うので、「君のとつは錆がひどくてもうだめだよ。私のパイナップル畑で雑草取りをしてくれたら、新しいのを買ってあげるから」と答えました。けれども彼は、「この方がいい音デル」と言い張ります。私は、「まさか、こんなオンボロがいい音を出すはずはない」と言いました。あんなにさび付いたハーモニカを、一体どこで見つけてきたのか、全くあきれてしまいました。彼が力いっぱいそれを吹くと、かろうじて一音だけ鳴りました。全くひどい音でした。彼は、「パイナップル畑で働くのはめんどうだから、これを直してくれ」と言うのです。スコップも、柄が折れているものから、真っ二つに裂けているもの、金属部分が折れ曲がっているもの、ばらばらになっているものまで様々でした。私は自分の弓のこを取り出して、本当は直す価値もないスコップのリベットを切ることから始めました。しかし、修理を断るのも恐ろしい。またまた眠れぬ夜を過ごすのはごめんでした。途方にくれた私は、神様に祈りました。「主よ、一体どういうことなのか、わけが分かりません。でも、あなたがやれとおっしゃるのでしたら、彼らのがらくたを直します」。

それでも、腹の虫がおさまらなかったので、彼らに向かって、

「全く、自分のがらくたは自分で直せばいいのに」と不平をこぼしました。すると彼らは、「道具を貸してくれたら自分でやりますよ」と言います。いやいや、連中に私の道具を使わせるわけにはいきません。一度、誰かにやすりを貸したことがありました。貸すのは二十四時間に限定し、「ナタとナイフだけに使い、斧には使わないように」と注意したのですが、結局斧にも使ったようです。私のやすりがどうなってしまったと思います？全く信じられませんでした。彼らは交替で夜通しそれを使い続け、やすりがボールペンの表面よりもすべすべになっていたのです。信じられますか？二十四時間のうちですよ。しかも、自分でそうしておきながら、「このやすりは使い物にならない」と文句を言っているんです。以来、彼らに道具は貸すまいと心に決めました。

結局その日は、彼らのがらくた修理に明け暮れました。次の日は、別の原住民ががらくたをもって押しかけてきました。どれも、救いようのないがらくたばかりです。

「ただでさえ、翻訳と現地語の勉強に追われているのに、神様はこんな事に私を巻き込みたいのだろうか？」と思いました。現地語の勉強がどれほど進んでいるか、週に一度は本部に報告しなければいけないんです。作業をしながらも、常に不平不満を言っていました。「君たちは時間泥棒だ！人の時間をむだにするのもほどほどにしたまえ」といった具合に。

「先生が俺たちに道具を貸してくれないからだ」と言うので、彼らに道具の使い方を教えようともしましたが、恐れていたとおり、またまた道具を壊されてしまいました。いらいらは募るばかりです。週に一度は、現地語の学習レポートを書かなくてはいけません



ん。週に二十時間は現地語の勉強をすることになっていました。それが規則であり、守らなければ宣教師を続けてはいけなかったのです。現地語を習得しなければ、現地人らに福音を伝えることができないわけですから。そのような事情の下で、私はジレンマに苦しんでおりました。彼らは相変わらず、私の時間を奪いにやってきます。

年に一度の宣教師会議に行きました。がらくた修理を始めてからこの時まで、何か月も経過していました。ついに観念した私は、彼らに私の道具を使わせることにしました。「もう使い方は分かっただろう」と言って、弓のことドリルの使い方を説明しました。私が教えた連中は、何とか使いこなすことができるようになりました。「他の連中にも使い方を教えるんだぞ」と念を押したのですが、彼らは私の勧告を無視しました。彼らは自分の物を修理したら、使い方を知らない連中に道具を渡して帰って行ったのです。残された者たちが、道具を全部壊してしまいました。弓のこは刃が折れ曲がっていて、さんざんな有様でした。それから彼らは数週間後に再びやって来て、「他に刃はないか？」と尋ねるので、「工具箱にあるよ」と教えてあげたら、予備の刃と、ドリルのビットをことごとく壊されてしまいました。金づちまでも、折られてしまいました。一体どのような使い方をしたのか、さっぱり分かりませんでした。「君たちは何て事をしてくれたんだ」と言ったら、「先生の道具はどれもこれも役立たずだ」と言われてしまいました。

本当に腹が立ちました。それは、私が自分のすべての所有物を神様に明け渡していたことを忘れてしまっていたからです。彼らは、私に残された最後の弓のこの刃とドリルのビットまでも使わせろと迫ってきます。最後の物だけはどうしても使わせたくありませんでした。壊されるのは目に見えていたからです。「もう使わ

せてあげない」と言ったら、再びけちん坊呼ばわりされてしまいました。最後に残った物以外は全部与えたのに、それでも私をけちん坊呼ばわりするのです。途方にくれた私は、「神様、最後に残った道具までも与えなくてはいけないのですか？」と祈りました。勿論、神様は即答なさいませんでした。私が答えを知っていたことを、主はご存知だったのです。とうとう私は、最後に残った道具を、彼らに手渡し・・・はしないで、彼らに向かって投げつけました。「いっそのこと今ここでぶち壊したらどうだ」という捨てぜりふを残して。

パイナップル・ストーリーにおいてすべての所有物を神様に明け渡した後、なんとも言えない喜びを心の底から味わうことができました。精神安定剤も要らなくなりました。健康状態も回復し、今度こそ、この部族をキリスト教に改宗させることができるぞという意気込みが湧いてきました。今度こそ、神様に有効に用いていただけたと思いました。宣教師となるべく自らの生涯を捧げただけでなく、自分の持ち物までもすべて神様に捧げたのですから。他にも捧げるべきものがあつたとは、思いもしませんでした。

神様が、天から私を見下ろしている様子を想像してみてください。「あの男はずいぶん幸福そうにしているな。夜もよく眠れるようになったみたいだ。喜びと自信にあふれ、今度こそ部族の者たちをキリストに導くことができると信じている。ここで水をさすのは気が進まないのだけれど、彼は八年かかって第一学年を修了したばかりだ。しかも、三十九歳になっている。他の学年を修了するのにそれほどの時間がかかったら、私の学校を卒業することはできないだろう。気は進まないけれど、次の学年を修学させねば」。神様は私のことをよくご存知で、追い詰められなければ私が降参しないこともご存知なのです。ほとんどの人は、プレッシャーがある程度強まれば、神様に対して降参すると思います。主は、私

神様の学校—権利の放棄

たちが物質的なものをすべて明け渡すまで、私たちの物を取り去られることがあります。私たちが本当の意味で管理できないものを与えるほど、神様は愚か者ではありません。いつまでも存続しないものに固執する人こそが、愚か者なのです。

神様は、私の所有物と時間を支配したいと望んでおられます。主は言われます：「あの男は、まだ時間の領域において問題があるようだ。だからもしも、大勢の原住民を彼のもとに來させて、彼の時間を奪わせれば、恐らく降参するだろう」と。神様は、私のすべての領域を支配したいと望んでおられるのです。そこで、「この頑固なオランダ人を屈服させるには、これしかない」と言って、原住民を次から次へと私のもとに送られたのだと思うのです。私はいらいらしてしまいました。現地語の勉強をしなくてはならないし、教区の要求にも応えなくてはなりません。夜にはまた安定剤が必要になり、パイナップル・ストーリーで味わった喜びも、どこかへ行ってしまいました。幸福だった時のことを思い出して、ますます落ち込んでしまいました。皆さんも、そういうことがありますか？「あの頃に戻りたいな」とか、「独身の頃は良かったな」とか・・・？年をとればとるほど人生が複雑になり、より単純で若さにあふれていた頃が懐かしくなることはありませんか。

原住民が次から次へとやってきたり、子育てに追われたりしていると、以前のように神様との個人的な交わりの時間がなかなか取れず、自分は背教に向かっているのではないかと、との不安に駆られることもありました。しかし実際には、背教に向かっているのではなく、第二学年で学ばされていたのでした。より高いレベルの課題に四苦八苦していたわけです。ですから、人生の



学び舎にあって、以前よりも辛い境遇に置かれても、意気消沈し、くじけてしまっただけではありません。この課題を修得すれば、次の学年に進級させてもらえるのです。そうは見えなくても、実際は向上しているのです。

当時は私もそのことが分からずに、神様に向かって訴えていました。「神様、お願いですから、この連中を何とかしてください。宣教師としての仕事を私が遂行できるように、彼らがここに来るのを阻止してください。神様、どうか助けてください。私の大切な時間が奪われています。私ひとりで、あれだけ大勢の人たちの要求に応えることはとてもできません」。しかし、どんなに祈って助けを求めても、神様は私の祈りを聞いておられないかのように思われました。それどころか、私のもとに持ち込まれるがらくたは、増える一方でした。かえって、神様がそのように仕向けているようにさえ思われました。なぜなら、いつしか他の村からも、原住民が押し寄せてきていたからです。神様に助けを求めれば求めるほど、状況は悪化していくように思われました。皆さんも、似たような経験をされたことはありませんか？

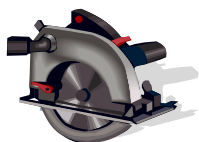
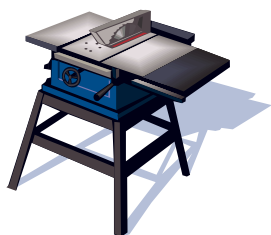
年次総会の時がやってきました。霊的な学びの集会もありますが、この時に、現地語学習のレポートも発表しなければなりません。参加する宣教師の中には、現地語を速やかに習得し、非の打ち所のない学習レポートを提出する優等生君もいます。この人は、現地語の勉強以外何もしていないのではないかと、皮肉を言ってやりたくなるくらいです。参加者は四十人ほどいて、宣教師の妻たちも同席しています。その中で、この優等生君が先頭に立って自分の学習レポートを披露し、それから一人ひとりの宣教師に、「君の学習経過はどうか？」といった具合に尋ねて回ります。家内が私の耳元で、「あなたの番が来たら、一体何て言うつもり？」とささやきました。劣等生君と結婚してしまったという自覚があ

りますから、穏やかではありません。みんな、なかなか優秀なレポートを披露し、宣教師としての高い評価をもらっているようでした。いよいよ私の番が来ました。「コーニング先生、前回のレポートよりもいいものができましたか？」と尋ねられ、「いいえ」と答えるしかありませんでした。極めてばつの悪い状況でした。私をこの難局から救うために、すかさず次の質問が投げかけられました。「マルコによる福音書の翻訳は始めましたか？」この質問に対して、「言語学習が思うように進んでいませんので、翻訳どころではありません」と答えるしかありません。面食らった彼は、「一体どういうことですか？現地では、何をしていますのですか？」と尋ねてきました。この質問にだけは、決して答えるまいと心に決めていました。家内にも、「私のがらくた修理をしているなどとは、絶対誰にも言うんじゃないぞ」と念を押してありました。家内だけではありません。原住民たちにも、「(教区の役員であろうが、政府の役人であろうが、物資を運んでくるパイロットであろうが)よそ者には決して、つまり誰であろうと服を着ている人には、私がやっていることを口外してはいけない」と言い聞かせてありました。私のところのがらくたを持ってくるすべての原住民に、「この事は秘密だからな」と言い聞かせてあったのです。すると、たいていの人は次のように反応します。「先生、これは俺たちだけの秘密で、ここでやっている事は、他の誰も知らないということか？」中には、こんな人もいました。「ここでやっている事は、世界中で俺たちしか知らないということは、俺たちが世界で一番あたまがいいということか？」私が、「そのとおり！」と答えると、彼は鼻高々にスキップしながら帰って行きました。私が念を押すために、「もし誰かにこの事を話したら、その人も僕たちと同じくらい賢くなってしまうからな」と言うと、誰もが「絶対に言うものか」と答えます。彼らは本気で、自分たちが世界一賢い人間だと信じていました。そのように信じ込ませることは、私にとって

も好都合だったのです。

話をもとに戻しますが、「現地では何をしているのか？」と尋ねられたときに、私も家内も原住民たちも口を割らなければ、がらくた修理の件が発覚することはないだろうと踏んでいました。先の質問に対しては、「あれやこれや、いろんな事をしています」と答えました。嘘は言っていませんよ。修理しているがらくたは、鍋だったり、ハーモニカだったり、スコップだったり、実にいろいろあるわけですから。すると、「コーニング先生、あなたは優先順位のリストを作り、現地語の学習をその上位に入れなければいけませんよ」と言われました。そんな事は、言われなくても分かっています。それでも一応、これは何とありがたい助言だろうか、というような態度で話を聞いていました。「はい、全くおっしゃるとおりです」といった具合に。素直に助言に同意したため、長々と説教されることなく、もう一年の猶予をもらいました。このようにして、何とかその場を切り抜けました。

年次総会に参加したついでに、発電機と電動工具を仕入れました。電動工具があれば、時間を大いに節約できると考えたわけです。さっさとがらくた修理を済ませ、現地語の学習にとりかかれ



ば、教区も神様も満足してくれるだろうと思いました。現地に戻るとすぐに作業台を作り、電動工具一式をそこに掛けました。これまで抱えていた問題も、これでいっきに解決できると考えました。ところがこの策は、パイナップル・ストーリーのシェパード犬のようなものでした。私がシェパード犬を使って問題を解決しようとしたのを憶えていらっしゃいますか。事態は好転

すると思っていたのに、ますます悪化したのです。

再び、神様が天から見下ろしている様子を想像してみてください。「おやおや、あの男は、電動工具一式をそろえて得意になっている。ならば、もっとたくさんのがらくたを送り込んでやろう」。間もなくして、はるか遠く離れた部族の連中までも、私のところに押しかけてきました。彼らは少し背が低く、言語も異なっていて、最初は彼らの言っていることが理解できませんでした。それなのに、がらくたを持って押しつけてきたのです。一体どうやって、私のことを聞きつけたのでしょうか？お互いかたことのインドネシア語で、何とか言葉を交わすことができました。私は彼らにこう言いました。「君たちの地区にはカトリックの神父さんがいるだろう？彼のところのがらくたを持って行けばいいだろう」と。そしたら、「先生、神父さんは工具を持っていません」という答えが返ってきました。実にいまいましく思いましたが、私の負けです。結局、他の部族のがらくたまでも修理する羽目になりました。確かに仕事は速くなりましたが、もっと多くの時間を取られてしまいました。仕事量が大幅に増えたのです。私は、神様に向かって叫びました：「神様、私はあなたに従いたくて、自分の問題を解決しようとしたのです。がらくた修理の仕事を速やかにさばくために電動工具もそろえました。それなのに、仕事は増えるばかりです。どうか、助けてください」。私が自分で問題を解決しようと躍起になっている間、神様は、私が完全に屈服するのを待っておられたのです。

そうこうしている内に、別の部族からもがらくたが押し寄せてきました。とても背の高い原住民でした。彼らは比較的、政府の近くに住んでいるため、物も多く持っています。当然、がらくたも多く出ます。今では、三部族のがらくたを修理していました。このままでは、さらに他の部族からも人々が押し寄せてくるに違

いないと思い、途方に暮れてしまいました。文字通り、がらくた修理に明け暮れる日々でした。夜には、現地語の勉強が待っていました。私が過労で倒れるのではないかと、家内は心配しました。せっかくパイナップル・ストーリーの時にやめた精神安定剤を、再び服用していました。パイナップル・ストーリーで、「先生はクリスチャンになりましたね」と言われたのですが、今では、「先生はクリスチャンではありません」と言われていたのです。手痛い言葉でした。神様を喜ばせようと思って、懸命に働いていたのに、いつの間にか、不機嫌な人間になっていたのです。家内や子供たちに対しても、気難しい夫、父親になっていました。とても惨めでした。心を落ち着けて祈る時間も、御言葉を学ぶ時間もとれなくなっていました。ちょうどパイナップル・ストーリーの時のように、健康状態もほとんど限界にきていて、宣教師の仕事ももう続けられないと思いました。

ひざまずいて祈りました。「神様、私はどうすればよいのでしょうか？がらくた修理は、あなたが私に求められた事なのではないでしょうか？しかし教区からは、さらにハードな言語学習を求められます。両方の求めに応じるのは無理です」。神様に向かって熱烈な訴えをし、助けを請い求めました。それでも、答えはありません。とうとう祈り疲れて、黙りこくりました。皆さんも、そのような経験はありませんか。しかし、そういう時こそ、主からお言葉を賜わることができるのです。心に質問が与えられました。「お前が自分の所有物を私に明け渡したときに、何が起こったか？」「神様、パイナップルを始め、あなたは私が捧げたすべての物を祝福してくださいま

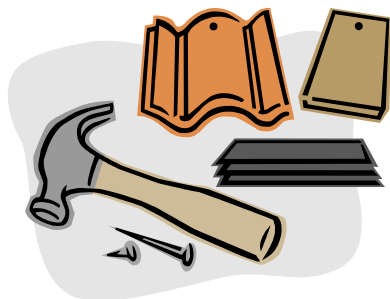


した」。突然、光が差し込んだように思われました。「神様、私の時間もあなたにお捧げいたします。あなたが私に、一生がらくた修理をせよと言われるのなら、そのようにいたします」。このようにして、私は自分の時間を神様に明け渡しました。明日からは、喜んでがらくた修理にいそしもうと決心しました。その晩、「神様、残りの生涯、あなたが私に何を望まれようと、私の所有物同様、時間もあなたのものです」と祈ってから、眠りにつきました。

翌朝、いつもの如く、がらくたを手にした原住民が私を待っていました。私は、彼らに向かって微笑みかけました。連中は、信じられない、といった顔をしていました。私は優しく、「では、さっさと仕事に取りかかろうか」と言いました。二、三日たってから、「先生、またまたクリスチャンになりましたね」と言われました。あまり嬉しい褒め言葉ではありませんでしたが、何と言われようと、喜んでがらくた修理に取り組むことにしていましたので、動ずることはありません。もはや、気難しい態度ではなく、快活に仕事をしながら、彼らにキリストのことを教えていました。修理を終えたら、「私のために教会に来て、キリストのお話を聴いてくれないか？家族の人たちも連れてきてくれたまえ」と頼みました。本国に連れ戻されるかもしれないという危機感を覚えていましたが、実のところ、それだけはいやでした。当時、私の父はまだ生きていました。父と私の間には、ある問題がありました。私は次男坊ですが、兄は何でもできる利発な子供でした。それに比べて、私は何をやっても鈍くさい子供だったのです。何かにつけて兄と比較され、しばしば父親からは、「お前は何のとりえもない奴だ」と言われていました。そのために、反骨精神のようなものが私の中にありました。いつか自分にも取り柄があることを証明してやりたい、とあって育ったような気がします。それが幸いしたかどうかは分かりませんが、兄弟の中で、私だけが高校を卒

業しました。他の兄弟よりも私の方が賢かったわけではありませんが、その後、大学も卒業することができました。宣教師になってからも、まだ心のどこかで、「自分にもとりえがあることをお父さんに証明しなければ」と思っていました。ですから、どうしても挫折して本国に戻るわけにはいかなかったのです。父親はまだ生きていましたから。亡くなっていれば、話は違っていたかもしれません。「やっぱりお前は何のとりえもない奴だ!」と言われずに済んだでしょうから・・・

快活に仕事ができるようになると、頭を切り替えることもできるようになり、がらくた修理を伝道に利用しよう、という考えが浮かんできたわけです。私にがらくた修理をしてもらった人は、家族も一緒に、全員が教会へ来るよう



になりました。やがて、がらくた修理をしに、自分から他の村へ足を運ぶようになり、その結果、他の部族の人たちもこぞって教会にやってきました。私が行くところどこでも、人々は教会にやってくるようになりました。ある日、家内のためにロッキング・チェアを直していたら、窓の外からその様子を見ていた原住民のひとりが（連中はいつでも平気で窓の外から他人の家を覗きます）、「先生、手伝いましょうか?」と言いました。私は、「よろしく頼む」と答えました。彼は家の中に入ってきて、上手に私の手伝いをしてくれました。修理を終えてから、「報酬は何が欲しい?」と尋ねると、「何も欲しくはありません」と答えるではありませんか。すっかり面食らってしまった私は、「本当に何も欲しくはないのか?」と聞き返しました。彼は、「いいえ、先生は俺のスコップ

を直してくれた。お礼に、手伝うのは当たり前」と言うのです。彼らの中で、何か変化が起っていました。愛は、愛によって目覚めさせられるのです。原住民が教会へ来るようになったので、これまでよりも容易に、彼らにキリストを紹介することができるようになりました。しかしながら、現地語の学習は、全く進んでいませんでした。机に向かうことすら、ほとんどありませんでしたから。大勢の原住民が、教会にやってくるようになりました。特に、一家のあるじである男たちには、お祈りの仕方を教えました。教会は活気づいて良かったのですが、まだまだ問題は山積していました。家内が、「今度の年次総会では、どんな言い訳をするつもり？あと四か月しかありませんよ」と尋ねました。私は、「分からない。でも、今度こそごまかしは通用しないだろう」と言いました。「いいかげん、がらくた修理はやめたらどうですか？」と懇願する彼女に、「神様がやめさせてくださらないのだから、仕方がない」と答えると、頭を振って、その場から立ち去ってしまいました。

年次総会があと二か月に迫っていた頃、教区から、宣教師の調査のため、お偉いさんがやってくることになりました。言うなれば、彼は私の上司で、私の至らないところを探し出し、まずい点があれば厳しく指導してやろうと思って来ているわけですが、彼は現地語が全く話せません。そういう意味では、私のほうに地の利がありました。

そのお偉いさんは、土曜日の午後に着することになっていました。ちょうどその頃、私は十人の男たちに教会での説教の仕方を教えていました。その男たちにこう吹き込みました：「もうじき、我々を調査しに(実



のところ調査の対象は私だけでしたが) ある人がやってくる。その人には、我々のいいところだけを見せなくてはいけない。決してへまをしないように」。それから、最も優秀な男を選び、彼に向かって、「明日の集会では、君が説教をするように」と指示を与えました。彼は、「何を話していいか分かりません」と言うので、「何でもいいから、自分が一番得意の、お気に入りの話をしなさい」と助言を与えました。「とにかく大きな声で、熱心に話しなさい。同じ話を二度繰り返してもいいから（どうせ、教区のお偉いさんには分かりっこありません)」。それから、一番歌の上手な男に、讃美歌礼拝を担当させました。このようにして、教区からの訪問者を迎えるのに、準備万端ととのえました。会衆に対しても、普段以上に大声で讃美歌を歌い、説教を聴くときには頭を振って「アーメン、アーメン」と言うように指示を出させました。

とうとう、そのお偉いさんが物資運搬用の飛行機でやってきました。出迎えた私と握手を交わすや否や、彼は思っていたとおりの質問を投げかけてきました。「現地語の学習は順調に進んでいるんだろう？」私が「はい！」と答えるのを大いに期待している表情でした。ところが私は、「いいえ、あまりうまくいっていません」と答えたのです。彼の期待を裏切ったことについては、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。「聖書の翻訳は始めたんだろうね？」との問いに対しても、「いいえ、まだ現地語をそこまで使いこなすことができません」と答えるしかありませんでした。彼は明らかに失望した表情で、「オットー君、君は一体ここで何をしているんだね？」と尋ねました。私は心の中で、「それだけは決して言うまい」と思いました。念を押してありますので、家内も原住民の人たちも決して言わないはずです。私のもくろみでは、彼の任務は失敗に終わることになっていました。「君はここで何をしているんだね？」との質問に、私は、「あれやこれや、いろんな事で

す」と答えました。勿論、そんな曖昧な答えで満足してくれるわけはありません。彼はさらに、私に詰め寄ろうとしましたが、そのたびに原住民たちが話に割り込んできます。彼らは、いつもこのように無作法なのですが、この時ばかりは私にとって好都合でした。お陰で、追い詰められずに済んだわけですから。そして、彼らは私に向かって、「先生、見て見て！この白人、実にまぬけな顔をしているね。この人は、何も知らないんでしょう？洋服は着ているけれど、俺たちよりも頭が悪いんだ。俺たちが世界で一番頭がいいんだから。そうでしょう？先生」と言うので、私も調子に乗って、「そのとおり！」と答えると、みんながお腹を抱えて笑い転げていました。私もこらえきれずに大笑いしてしまいましたが、教区からの訪問者だけは、何がなんだかわけが分からないという顔をしていました。「何がそんなにおかしいのだ？」と訊かれたので、「ここの部族特有のジョークなんですよ。訳すのは、ちょっと難しいですね」と答えてしまいました。結局そこでは、このようにして難局を乗り切ることができました。

それから、彼を私の住宅に案内しました。彼は私の作業場を見て、目を丸くしてしまいました。電動工具など、設備が整っていることに驚いたわけです。彼は思わず、「ここでは何をやるんだ？」と訊いたんです。勿論、これはおかしい質問です。作業場では、壊れた物を修理するに決まっていますから。しかしこの時、私は作業場をきれいに片付けてあり、念のために修理中の物も置いていませんでした。工具はきちんと壁に掛けてありました。それから、「君はここでかなりの時間を費やすのかね？」と訊いてきました。その質問だけはして欲しくなかったのですが、幸い原住民たちが窓の外から覗いていて、やじを飛ばしたりしていました。とっさに、「外が騒がしいですね。何かあるみたいですよ」と言って、彼を作業場から外に連れ出しました。このように、原住民のお陰

で、何度も窮地を脱することができました。

日曜日の朝になりました。いよいよショーの始まりです。集会の開始を知らせる鐘が鳴ると、教区からのお偉いさんが、「そろそろ教会に行きましようか」と促すので、私は、「いいえ、私たちは一番後に入っていくことになっています」と言いました。集会が始まるのを待ってから、私たちは中に入り、席につきました。間もなく、説教が始まりました。私が

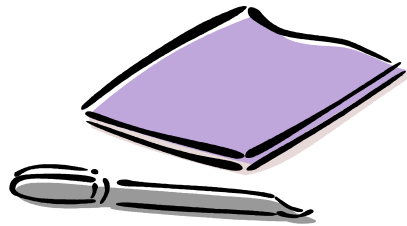


説教者に選んだ男は、期待以上の働きをしてくれました。熱烈に大声で語り、メッセージ自体もすばらしい内容でした。そして、会衆も盛んに「アーメン、アーメン！」と応えていました。また、この日に限って、教会は満員の状態でした。他の村からも、応援が駆けつけてくれていたようなのです。讚美歌礼拝も活気にあふれていました。そこの住民はあまり歌が上手ではありません。にもかかわらず、みんな一生懸命歌っていました。集会を見て、彼は、全く信じられないといった顔をしていました。

集会が終わってから、彼は、「今でも信じられない」と言いました。「会衆の賛美といい、あの説教者といい、実にすばしかった！ところで、あれは全部君が指導したのかね（他に誰が指導したというのでしょうか）？」という具合に、すこぶる感心した様子でした。「君が受け持っている教会はいくつあるのかね？」と尋ねるので、「三つです」と答えました。するとまた、「本当に信じられない」を連発しています。「君がここに来てから、何年になるのかね？」と尋ねるので、「八年くらいです」と答えました。彼はこう言いました：「この地方で、これほど盛んな教会は見たことがない。しか

も、たった八年で、これほどの教会成長を遂げたと言うのかね？いやあ、信じられんなあ」。彼によると、私の教会は、他と比べれば五年から十年も進んでいるそうなのです。「君はここで、どんな事をしているのかね？」と尋ねるので、「たっぷり時間をかけて、現地の人たちと交わっています（がらくた修理をしながらですが・・・）」と答えました。さもありがたみ、といった様子でした。集会中のお祈りにも、感銘を受けたようです。彼らは目立ちたがり屋なので、集会の時には、われ先にとお祈りの役を買って出ます。彼らの気持ちを汲んで、集会中は賛美歌の合間にも、証と証の間にも代わりばんこでお祈りをさせることにしました。不思議に思った彼は、「どうしてそんなに大勢の人がお祈りをするのか？」と尋ねたわけです。私は、誰もかれもがお祈りの役を買って出るので、みんなにお祈りをあてるのにとっても苦労していると説明しました。非常に驚いた彼は、「私の教会では、誰もお祈りをしたがないのに・・・この教会は本当にすごい！」と言って、ますます感心していました。私が自分の時間を主に捧げていたことについては、無論知る由もありません。最後に彼は、「どうぞ、今の働きを継続してください」と言って、月曜日の朝にそこを去りました。事実上、私にがらくた修理を継続する許可をくれたわけです。無論、その事を知らずにですけれども・・・。

再び、年次総会に出向くことになりました。現地語学習のレポート発表の前日、私も家内もなかなか眠れませんでした。いよいよ年貢の納め時です。これで私たちは、本国に帰されるだろうと思いました。明日、私の評判は地に墜ちることでしょう。「評判」は、私にとって、神様



の学校の第三学年における課題でありました。第一学年では私の「所有物」を明け渡すことを学び、第二学年では私の「時間」を明け渡すことを学んだわけです。事実、私の時間を主に捧げて以来、喜びにあふれる生活を取り戻すことができました。精神安定剤も不要になりました。「これで神様は、私を思う存分用いることができになる」と信じていました。ところが神様は、天からご覧になり、「ああ、ようやく第二学年を修了したようだ！ 進級させて、学びを継続させよう」とお考えになったはずです。なぜなら主は、私がキリストのみかたちを反映させるようになることを望んでおられるからです。皆さんに対しても、神様が抱いておられる理想は同じです。ですから皆さんも神様の学校で学んでいて、そのために奮闘し、苦しんでいらっしゃるかもしれません。主は、私たち全員が、キリストのようになることを望んでおられます。そのために、私たちを学校に入れるわけです。この事だけは、はっきり申し上げておきたいと思います。クリスチャンになろうと決心する人には、神様の学校での様々な課題が待っています。神様は、私たちがすべてを主に明け渡して、幸福になることを喜ばれるのです。できることなら、私たちが苦しまないで済むようにと望んでおられます。初めから、私たちが主にすべてを明け渡して、各学年の学びを修了できれば、と望んでおられるわけです。親も、できれば子供を懲らしめることなく指導していきたいと考えます。しかし、時にはどうしても懲らしめのむちが必要なのです。

現地語学習レポートを発表しなければならない前の晩、私は再び神様に嘆願していました。「神様、このままでは本国に帰されてしまいます。どうすればよいのでしょうか？ 私はあなたのために働きたいのです」。さんざん訴えたあげく、私は沈黙しました。すると再び、「お前が自分の所有物を私に明け渡したときに、何が起こ

ったか？」との問いが聞こえてきました。神様はしばしば、私たちの質問に、質問をもってお答えになることがあります。聖書にも、そのような事例が数多く載っています。次に、「お前が自分の時間を私に明け渡したときに、何が起こったか？」との問いが、心の中で聞こえてきました。「私の宣教区では、伝道が十年も先を行っていると言われました。しかも私ががらくたを直してあげたので、人々は進んで教会に来るようになりました」と答えました。そして突然、自分の評判が失われるのを恐れていることに気がついたのです。「神様、私の評判もあなたにお捧げいたします」と祈りました。朝になれば、どうせ失うことになるわけですから。でも、それを失う前に放棄することが重要なのです。皆さんも、それが何であれ、選択の余地が残されている間に、自分のものを主の祭壇に捧げましょう。「神様、明日どのような処分が下されようとも、喜んでお受けいたします。本国に帰されることになっても構いません。そして父から、『やっぱり、何のとりえもない奴だ』と言われようとも、微笑んでいたいと思います」。父に対する反発も、結局は私が自分の評判を気にしていたことが原因だったので、自らの評判を主に明け渡すならば、人間関係におけるほとんどの問題は解消されます。私の心に、喜びが戻ってきました。たとえどのように思われようと、すべて正直に話す決心をしました。

いよいよ学習レポート発表の 때가 やってきました。私の心境の変化について何も知らない家内は、最初から赤面しています。彼女の身になって考えれば、でき損ないの夫を持つ妻として同席しなければならぬわけですから、ばつが悪いのも無理ありません。そういう彼女の横で、私はニコニコしていました。自らの評判をも放棄した私には、何も失うものがなかったわけです。ニコニコしている私を見て、家内は、「何をニタニタしているの（こっちはニコニコしているつもりなのだけど・・・）？気は確かなの？」

と囁きました。この日が近づくにつれて、私が苦悩していたことを知っていましたから、とうとう、神経のどこかがぷつぷつ切れてしまったかと思ったようです。報告会はすでに始まっていて、私の番が近づいてきていました。家内は私に、「何をお話するつもり？ 訊かれない事は、答えなくてもいいのですよ」と言いました。「分かっている。でも、嘘だけはつかないつもりだ」と答えて平然としている私を、全く理解できないようでした。いよいよ私の番がやってきました。司会者の人が、「コーニング先生、先の総会以来、現地語の学習に進展はありましたか？」と尋ねました。私が満面の笑みを浮かべながら、「いいえ」と答えたので、すっかり面食らっていました。驚いたことに、彼はそれ以上何も言わずにうつむいてしまったのです。彼だけではありません。出席している宣教師たち全員が、うつむいてしまったのです。最初からうつむいている家内を含め、私以外の全員がうつむいてしまいました。皆さんも一度試してみてください。まじめな集まりで、自分がしくじったことを告白し、そして微笑むんです。居合わせた人たちは、この不自然な組み合わせにどう反応してよいか分からなくなります。但しその前に、自分の評判を祭壇に捧げなければなりません。そうでないと、まじめな集まりで自分がしくじったことを告白しておきながら、微笑むことなんかできないはずです。

うつむいている人たちを見回して、「ああ、私は自由だ！」としみじみ思いました。すると突然、私のところへ視察に来た宣教師が立ち上がり、次のように発言しました。「ちょっと待ってください。コーニング兄弟の処遇について話し合う前に、言いたい事があります。どうか皆さんも、



彼が担当している教会へ行って見てください。私はそこへ行って、集会に出席しました。原住民の説教と、会衆の賛美を皆さんも聴くべきです。そこでは、みんながお祈りをいたします。我々は、この兄弟から学ぶべき事が多くあるはずです！」全員が顔を上げ、司会者の人が、「とても良い報告を聞かせてもらいました。ところでコーニング先生、現地では何をなさっているのですか？」と言いました。なんだか自分にとって状況が好転しているようだったので、自信が湧いてきて、「たっぷり時間をかけて、現地の人たちと交わっています」と答えました。調子に乗って、「あれこれと、何でもやっています」とも言いました。それから、別の人が立ち上がり、「コーニング先生、あなたはどんな伝道方法を用いらっしゃるのですか？」と尋ねました。少々まごつきましたが、「時間をかけて現地人と交わると、彼らは教会に来てくれるようになり、多くの人が神様を受け入れたんです」と答えると、みんな納得してくれて、「すばらしいですね。今の働きを継続してください」との励ましまでいただきました。これで事実上、教区からもがらくた修理の許可をもらったわけです。こうして、無事に総会を終えて戻ってくることができました。

皆さん、問題に直面したときは、孤軍奮闘するのではなく、神様にすべてをお任せしましょう。神様の学校において、飛び級はできません。世の学校においても同じですよ。ね。「〇〇君は読み書きがうまくできないので、とりあえず、算数のお勉強だけさせましょう」と言う先生はいないはず。神様も、私たちが一つの課題を修得するまで、あの手この手でプレッシャーをかけてきます。私の父は、第一学年も修了することができませんでした。オランダ人特有の、物に執着するタイプでした。戦時中、ドイツ人に奪われないように、銀の宝物をどこかに隠しました。戦争が終わって、それが見つからなかったので、逆上していました。自分

のためには、決してお金を使いませんでした。大変な働き者でした。いくつかの仕事を掛け持ち、それで儲かっても、どういうわけか儲けがばあになるんです。そのような事態に追い込んでまで、神様が父に教えようとしておられたのだと思います。教会には、惜しまず献金をする人でした。教会に多く捧げれば、それだけ見返りも大きいと考えていたのです。教会に献金し、自分のためにも多く蓄えようと思いました。それを自分のために使うことはありませんでした。七十七年の生涯を終えたとき、父の残した遺産は、半分しか支払いが済んでいない小さな家だけでした。これが働き詰めの生涯を送り、教会に多額の献金をし、蓄えることに懸命だった人の結末であります。

昏睡状態になって息を引きとる前に、彼は私と私の息子にこう言ったのです。「自分自身のために財産を蓄えようとするな。金持ちになろうとしてはいけない。イエス・キリストだけに仕え、あとは何も思い煩うな。神様に仕えること以外、重要なものは何もないから」。皆さん、お分かりですか。私の父は、死の床にあって、ついにすべてを放棄したのです。その時、彼は第一学年を修了したと私は考えています。しかし悲しいことに、彼に終業式の喜びを味わう時間は残されていませんでした。



その年、私は宣教地区の顧問に選ばれました。長年、やってみたくも思っていた役職です。これまで、その役職を獲得するために、できる限りの犠牲を払い、努力を惜しみませんでした。しかし、どんなに根回しをしても、役員たちに好印象を与えようとしても、選出されることはありませんでした。総会のたびに、く

やしい思いをしていました。ところがその年の総会には、もはやそんな事を気にすることなく、平安な気持ちで臨むことができました。自分の評判を捧げたわけですから、上の地位に就きたいという思いはなくなっていました。そうしたら、誰が最初に選ばれたと思いますか？ どういうわけか、この私が選ばれたのでした。イエス様は、「自分を低くする者は、高くされるであろう」と言われましたね（マタイ 23：12）。これは、真理であります。天が定めた法則なのです。反対に、自ら高ぶる者は、卑しめられるでしょう。

「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう」（I ペテロ 5：6）。神様は力強い御手を持っておられ、実に様々な方法を用いて、私たちに教訓を与えようとしておられます。神様の学校においては、さらなる学年へと進級していかなければなりません。私には、あと何学年残っているのか分かりませんが、第五学年あたりから、私もようやくこつをつかみました。神様から権利を放棄するように求められているのだと分かると、すぐに応答して捧げるようになりました。しかし、第四学年は私の子供たちでした。子供たちを祭壇に捧げるのに手間どり、とても苦労しました。子供を本当に失いかけたときに、ようやく悟ることができたのでした。辛い経験でした。第五学年は私の妻でした。

今日、教会においても、傷ついている人たちを多く見かけます。なぜクリスチャンが傷つくのか、驚きを覚えます。ある姉妹が癌を患い、死期が迫ってきました。彼女は生涯教会に通い続け、什一も諸献金も忠実に捧げてきました。私は天に向かって、「神様、一体どういうことですか？ この女性は信心深い人です。生涯あなたに仕えてきたではありませんか？ どうして、最期にこれほど苦しまなくてはいけないのですか？」と訴えました。他にも、多く

のクリスチャンが苦しんでいます。時には、クリスチャンが福音を知らない世の人々よりも苦しむことがないでしょうか。そのような時に、当惑することがないでしょうか。皆さん、私たちは神様の学校に在学しているのです。世の人々はそうではありません。主は、私たちがキリストのようになることを望んでおられます。そのために、私たちに圧力をかけられることがあるのです。それに応えないと、さらなる圧力が加えられます。キリストに似る者とするために、主は私たちが病床につくことをお許しになるかもしれません。クリスチャンが病気で臥すことになったら、神様に助けを呼び求めないでしょうか？かの女性信者は、一つの領域において、まだ自分の権利に固執していたのかもしれません。すべての権利を放棄していたら、主は病気の苦しみを、あるいは病気そのものを取り除かれたかもしれないのです。私は思うのですが、病気の人が健康になる権利を放棄しない限り、その人のために油注ぎの祈りすらやるべきではありません。健康であれ、時間であれ、妻子であれ、自らの評判であれ、能力であれ、すべての領域を主に捧げなければいけないのです。多くのクリスチャンが味わっている苦しみのほとんどは、本当は避けられると思うのです。確かに、他の理由で苦しみがやってくる場合もあります。しかし、クリスチャンの中に見られる苦しみの最大の理由は、教会を清めるために神様がお許しになる試練、訓練であります。神様は、私たちが純金にするために、必要とあれば火のような試練をもお許しになるのです。そして、私たちが権利を明け渡しさえするならば、多くの試練や苦しみを避けることができるのです。ですから、皆さんが苦しんでいる人を見かけたら、「神にすべてを明け渡しなさい」と言ってあげてください。私たちがすべての権利を放棄して主に委ねるとき、主が最善と思われることを行ってくださいでしょう。繰り返しますが、神様のご計画は、私たちがキリストに似る者にまで成長することなのです。

神様の学校—権利の放棄

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」（ローマ 8 : 28）。

パイナップル ストーリー

オットー・コーニング

砂川 満 訳

発行 サンライズ・ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊 1471

Tel (0980) 56-2783

Fax (0980) 56-2881

E-mail : contact@srministry.com

ホームページ : www.srministry.com